竹田市社会福祉協議会

法人設立 20 周年記念

20年のあゆみ

Profile ― プロフィール ―

- 名前：たけたん
- 年齢：ひみつ
- 好きな食べ物：かぼす
  （かぼすをいっぱい使った料理やスイーツが好き）
- 好きな場所：温泉巡りが好きです（竹田の温泉がお気に入り）
- 好きな言葉：愛

Color ― カラー ―

虹色（レインボーカラー）
…多様性をあらわす

緑のスカーフ　体の黄色
…竹田の特産物
カボスをイメージ

竹田市社会福祉協議会
マスコットキャラクター
たけたん

社会福祉法人　竹田市社会福祉協議会

目　次　Contents

ごあいさつ

竹田市社会福祉協議会　会長　木　部　眞里子 ―― 05
竹田市　市長　土　居　昌　弘 ―― 07

総　説　編

基本情報および福祉概要 ―― 11
社会福祉法人竹田市社会福祉協議会20年のあゆみ ―― 12-13
歴代会長 ―― 14
歴代会長からのお祝いの言葉 ―― 15-16
役員（理事・監事）及び評議員名簿 ―― 17-22
（平成17年～令和7年）

事　業　編

●地域福祉活動事業
地区社会福祉協議会活動 ―― 25
生活支援体制整備事業 ―― 26-28
（生活支援コーディネーター、第1層協議体、第2層協議体、資源開発、
地域共生社会実現フォーラム、ボランティア人材発掘実態調査、
ささえあいボランティア養成講座）
福祉委員活動 ―― 29
ボランティアセンター（災害ボランティア活動、ボランティア活動） ―― 30-31
福祉教育活動 ―― 31
社会福祉法人連絡会 ―― 32
生活困窮者自立支援事業 ―― 33-34
（自立相談支援事業、就労準備支援事業、家計改善支援事業
被保護者就労支援事業、被保護者就労準備支援事業）
重層的支援体制整備事業 ―― 35-39
（包括的相談支援事業、多機関協働事業、アウトリーチ等を通じた
継続的支援事業、参加支援事業、地域づくり事業）
竹田市権利擁護・成年後見支援センター ―― 40
日常生活自立支援事業「あんしんサポートセンター竹田」 ―― 41
介護予防事業対象者実態把握事業 ―― 42
介護予防普及啓発事業（おしゃべりサロン） ―― 43
地域支え合い事業（暮らしのサポートセンター） ―― 44-45
介護職員初任者研修事業 ―― 46
●介護保険等事業
居宅介護支援事業（竹田市介護保険ケアプランセンター） ―― 47
訪問介護事業（ヘルパーステーション竹田） ―― 48
障がい福祉サービス事業（竹田障害福祉サービスセンター） ―― 49
地域密着型通所介護事業（荻町デイサービスセンター） ―― 50

●地域包括支援センター 51
総合相談・権利擁護事業 52
包括的・継続的ケアマネジメント事業 52
認知症総合支援事業 53
地域ケア会議 53
通所型・訪問型サービス事業 54
住宅改修・福祉用具適正化事業 54
第1号介護予防ケアマネジメント事業 55
地域リハビリテーション支援事業 56
介護予防支援事業 56
●子育て支援事業
幼保連携型認定こども園　荻げんきこども園 57-58
公私連携型保育所　久住保育所 59-60
地域子育て支援拠点事業　子育てひろば　うりっこ 61
放課後児童健全育成事業　荻ぷちとまとクラブ 62
●法人運営事業
役員（理事・監事）評議員の概要 63
●各団体支援
竹田市民生委員児童委員協議会 64
竹田市地区社協連絡協議会 64
竹田市ボランティア連絡協議会 65
竹田市共同募金委員会 65
●竹田市との共催事業
竹田市福祉功労者表彰式及びたけた福祉健康フェア 66
歳末助け合いチャリティーショー 66

●合併後20年間で休止・廃止した事業 67-68

●これからの社協のあるべき姿 71
合併20周年記念職員研修会 72-75

●先輩職員の方々からのメッセージ 79-84

資　料　編

社会福祉法人竹田市社会福祉協議会職員推移 87
社会福祉法人竹田市社会福祉協議会事業費総額推移 88
竹田市福祉功労者歴代受賞者一覧 89

ごあいさつ

MESSAGE

竹田市社会福祉協議会　会長　木　部　眞里子

竹田市　　市長　土　居　昌　弘

ごあいさつ

竹田市社会福祉協議会 会長　**木部　眞里子**

平成17年４月１日、旧竹田市・荻町・久住町・直入町の１市３町の合併で、新「竹田市」が誕生しました。これに伴い旧市町の社会福祉協議会が合併し、新「社会福祉法人竹田市社会福祉協議会」として設立認可されました。

このたび20周年の節目を迎えることができ「法人設立20周年記念誌」を発行することにいたしました。発行にあたり、皆様に一言ご挨拶を申し上げます。

設立20周年を迎えることができましたことも、ひとえに先輩諸氏、役職員のご尽力、そして市民皆様方のご支援ご協力の賜物と、深く感謝申し上げます。

初代会長は旧竹田市社会福祉協議会会長の（故）後藤宗昭会長が務め、以来私で６代目となります。この間、地域包括支援センター、認知症総合支援事業、病児保育事業、竹田市権利擁護・成年後見支援センター、生活支援体制整備事業、重層的支援体制整備事業等市からの受託事業や、地域福祉事業に積極的に取り組んでまいりました。

災害対応では、平成24年の「九州北部豪雨災害」の折、初めて「災害ボランティアセンター」を設置しました。また、平成28年４月に発生した「熊本地震」では被災地の南阿蘇とボランティアをつなぐ「竹田ボランティアベースキャンプ」を設置し、被災された地域の復旧・復興に貢献することができました。

近年、超少子高齢化の進展に伴い、人々の価値観、ライフスタイルや地域の絆も大きく変化し、生活困窮や引きこもり、ヤングケアラー、担い手不足等福祉のニーズは一層複雑化・多様化しております。このような複雑化する福祉ニーズに対応すべく【地域づくり・人づくり・つながる】をキーワードとして、役職員をはじめ市民の皆様とともに「人生輝くまち　たけた」を目指してまいりました。

市内の社会福祉法人で連絡会の設立、法人後見事業の実施、災害時福祉支援チーム（DWAT）の登録、フードドライブ事業、久住保育所の公私連携型保育所としての運営、社協オリジナルキャラクター「たけたん」の誕生など時代の流れとともに、新たな地域福祉活動に取り組んでまいりました。

継続してきた介護保険事業の運営は厳しく、竹田及び直入地区のデイサービス、訪問入浴サービスを休止しました。訪問介護事業も人材の確保が困難で、徐々に縮小しております。令和６年度末には玉来分所の老朽化により、事業を本所へ移転し、閉鎖しました。

今後も、市民の皆様が住み慣れた地域で安心して暮らせる「いのち輝く竹田市」を目指して様々な福祉活動を展開してまいります。

最後になりましたが、本記念誌の発行にご協力いただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、皆様のご健勝、ご多幸をご祈念申し上げご挨拶といたします。

「合併20周年記念誌」発刊によせて

竹田市長　土居　昌弘

社会福祉法人竹田市社会福祉協議会が合併20周年という大きな節目を迎えられ、記念誌が発行されますことを、心よりお祝い申し上げます。また、長年にわたり地域福祉の推進にご尽力いただきました歴代会長をはじめ、役職員の皆様、ボランティアの皆様、地域住民の皆様に深く感謝申し上げます。

竹田市社会福祉協議会は、平成17年の合併以来、「誰もが安心して暮らせるまちづくり」を目標に、地域に根ざした多様な活動を展開してこられました。高齢者や障がいのある方、子どもたち、生活に困難を抱える方々など、すべての市民が支え合い、助け合う社会の実現に向けて、日々たゆまぬ努力を続けてこられたことに、改めて深く敬意を表します。

この20年の間に、少子高齢化や人口減少、地域コミュニティの希薄化など、社会を取り巻く環境は大きく変化しましたが、そうした中にあっても、協議会は地域住民一人ひとりに寄り添い、福祉の現場で温かな支援の輪を広げてこられました。特に近年の新型コロナウイルス感染症の拡大という未曾有の事態においても、地域のつながりを守り、孤立や不安を抱える方々に対して迅速かつきめ細やかな支援を行ってこられたことは、地域福祉の要としての役割を十分に果たしていただいたものと感じております。

また、平成24年の九州北部豪雨や平成28年の熊本地震など、相次ぐ自然災害の発生時には、皆様は被災者支援の最前線で活動され、市民の生命と生活を守るために献身的なご尽力をいただきました。その活動は、私たち市民にとって大きな心の支えとなり、竹田市が復旧・復興に向けて歩む原動力となりました。改めて、心より感謝申し上げます。

社会福祉協議会の活動は、地域の皆様の積極的なご参加とご協力があってこそ成り立っており、日頃から地域福祉活動やボランティア活動にご尽力いただいている皆様の思いや行動が、竹田市の温かい地域社会を支える大きな力となっていることを、改めて実感しております。

今後も、社会福祉協議会の果たす役割はますます重要になってまいります。多様化・複雑化する福祉ニーズに的確に対応し、誰もが生き生きと暮らせる地域社会の実現に向けて、引き続きご尽力いただきますようお願い申し上げます。市といたしましても、協議会の皆様と連携し、地域福祉のさらなる充実と発展に努めてまいります。

結びに、竹田市社会福祉協議会の今後ますますのご発展と、関係者の皆様のご健勝、ご多幸を心より願い、合併20周年記念の祝辞とさせていただきます。

総　説　編

OVERVIEW

基本情報および福祉概要

竹田市社会福祉協議会　基本情報

郵便番号	878-0011
所在地	大分県竹田市大字会々1650番地
施設名	竹田市総合社会福祉センター
電話	０９７４－６３－１５４４
FAX	０９７４－６３－１０５０
メールアドレス	taketashakyo-info@taketa-shakyo.org
ホームページURL	https://www.taketa-shakyo.jp
法人設立年月日	平成17年４月１日
法人登記年月日	平成17年４月５日

竹田市の人口および福祉の概要

（令和7年4月1日現在）

1	人口	18,688	人
2	世帯数	9,644	世帯
3	65歳以上人口	9,288	人
4	65歳人口比	49.7	%
5	１人暮らし65歳以上人口	2,966	人
6	高齢者夫婦世帯	1,675	世帯
7	要支援者認定者数	483	人
8	要介護認定者数	1,374	人
9	身体障がい児・者（身障手帳所持者）	1,568	人
10	知的障がい児・者（療育手帳所持者）	237	人
11	精神障がい者（精神障がい者保健福祉手帳所持者）	263	人
12	18歳未満人口	1,896	人
13	18歳未満人口比	10.1	%
14	母子世帯	156	世帯
15	父子世帯	33	世帯
16	生活保護世帯	197	世帯
17	民生委員・児童委員	88	人
18	主任児童委員	11	人
19	自治会	351	地区

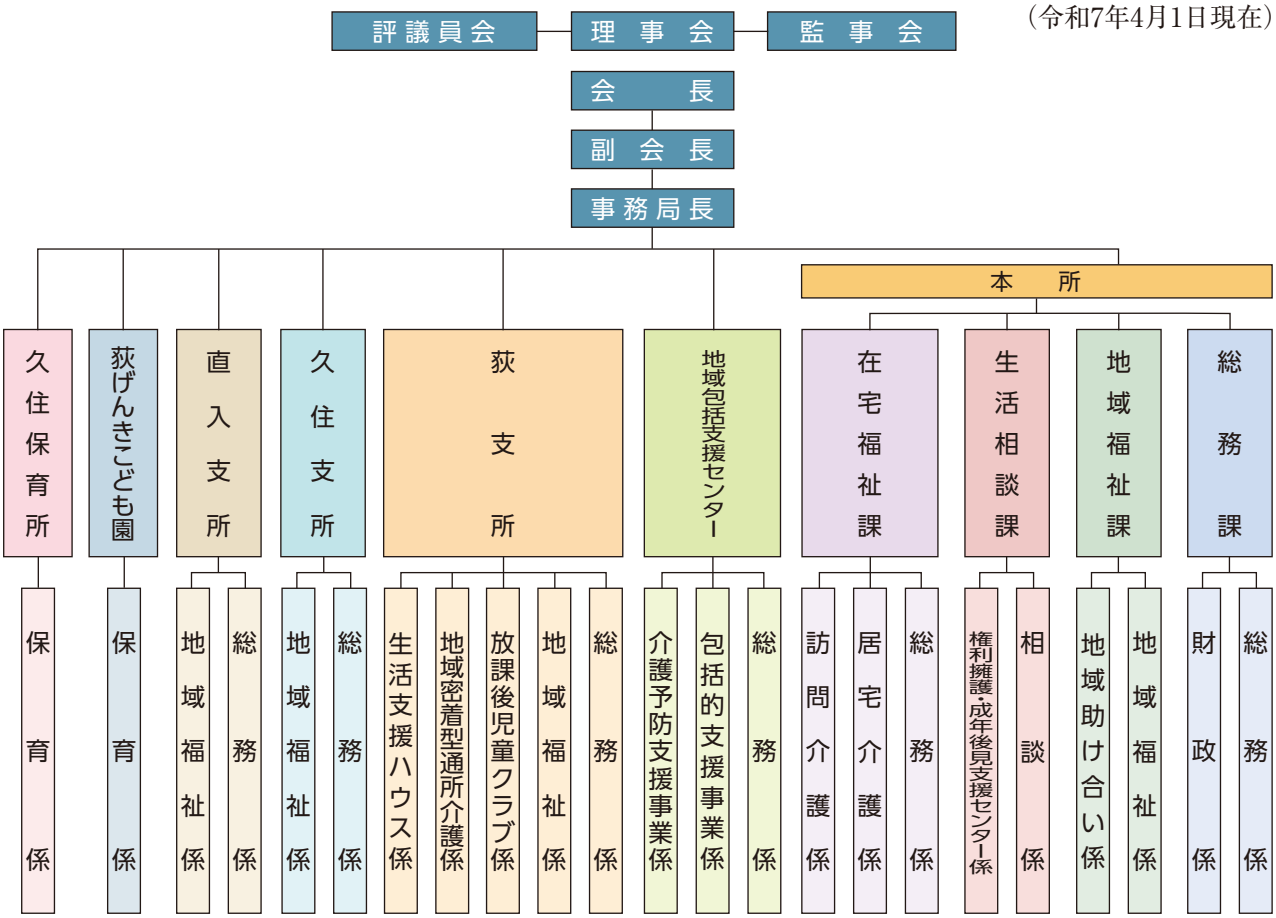
社会福祉法人竹田市社会福祉協議会20年のあゆみ

平成17年 4月 1日	一市三町（竹田市・荻町・久住町・直入町）社会福祉協議会が合併し、新「竹田市社会福祉協議会」設立 初代会長　後藤宗昭　就任
平成18年 3月31日	中央在宅介護支援センター（竹田地域）受託終了 在宅介護支援センター（荻地域・直入地域）受託終了
平成18年 4月 1日	地域包括支援センター受託 地域総合相談支援センター（荻地域・直入地域）受託
平成19年 4月 1日	二代目会長　髙橋　功　就任 第一次地域福祉活動計画策定
平成19年 5月 1日	（竹田・荻・直入）ケアプランセンター、訪問介護事業、訪問入浴介護事業を「竹田市介護保険ケアプランセンター」、「ヘルパーステーション竹田（訪問介護事業）」、「ヘルパーステーション竹田（訪問入浴介護事業）」に統合
平成19年10月 4日	竹田市内全地域に福祉委員配置
平成22年 3月31日	荻町介護保険サービスセンター（福祉用具貸与事業）廃止
平成23年 4月 1日	三代目会長　猪野　一男　就任
平成23年 9月 2日	介護職員初任者研修事業受託
平成24年 4月 1日	第二次地域福祉活動計画策定
平成24年 7月15日	九州北部豪雨災害により、初めて「災害ボランティアセンター」を設置
平成25年 7月18日	竹田市内全地域に地区社会福祉協議会設置
平成26年 3月31日	総合相談支援センター（荻地域・直入地域）受託終了
平成26年 4月 1日	おしゃべりサロン事業受託 高齢者相談支援センター（荻地域・久住地域・直入地域）受託
平成26年11月 1日	病児保育事業受託
平成27年 4月 1日	四代目会長　野田　良輔　就任 生活困窮者自立相談支援事業受託
平成28年 3月31日	ヘルパーステーション竹田（訪問入浴介護事業）廃止 竹田市介護保険サービスセンター（通所介護事業）及び直入町デイサービスセンター（通所介護事業）廃止
平成28年 4月 1日	荻保育園開園 菅生放課後児童クラブ事業受託 総合事業通所型サービス「しゃんとこクラブ」事業開始 認知症総合支援事業開始 地域リハビリテーション活動支援事業開始 介護保険福祉用具・住宅改修適正化事業開始
平成28年 5月 1日	南阿蘇支援ボランティア竹田ベースキャンプ開設
平成28年 7月 1日	プロ訪問事業（短期集中予防サービス）開始
平成29年 3月31日	高齢者相談支援センター（荻地域・久住地域・直入地域）受託終了
平成29年 4月 1日	第三次地域福祉活動計画策定 介護予防対象者把握事業受託
平成29年11月22日	全国社会福祉協議会会長表彰受賞 （社会福祉協議会優良活動）　竹田市社会福祉協議会 （社会福祉協議会・民間社会福祉団体功労）　佐藤てる代氏
平成30年 4月 1日	暮らしのサポートセンター事業開始（竹田市経済活性化促進協議会から事業移管） 生活支援体制整備事業受託 生活困窮者自立支援事業（被保護者就労支援事業、就労準備支援事業、被保護者就労準備支援事業、家計改善支援事業）受託
平成31年 3月31日	荻町介護保険サービスセンター（通所介護事業）廃止 総合事業通所型サービス「しゃんとこクラブ」事業終了
平成31年 4月 1日	荻町デイサービスセンター（地域密着型）開始
令和元年 7月 1日	介護予防訪問介護事業開始
令和 2年 3月31日	荻保育園閉園 竹田市児童館受託終了

令和 2年 4月 1日	五代目会長　倉野　脩生　就任 幼保連携型認定こども園「荻げんきこども園」開園 地域子育て支援拠点事業「子育てひろばうりっこ」受託
令和 2年12月31日	直入支援ハウス受託終了
令和 3年 1月 4日	竹田市権利擁護・成年後見支援センター受託
令和 3年 3月31日	高齢者の生きがいと健康づくり推進事業（生きがいサロン事業）受託終了
令和 3年 4月 1日	法人後見事業開始
令和 3年 6月25日	六代目会長　木部　眞里子　就任
令和 3年 7月 1日	通所型サービス事業（短期集中予防サービス）開始
令和 4年 4月 1日	重層的支援体制整備事業受託 第四次地域福祉活動計画策定
令和 4年11月 3日	瑞宝単光章受章（社会福祉功労）　佐藤てる代氏
令和 5年 4月 1日	マスコットキャラクター「たけたん」誕生
令和 5年 8月30日	竹田市社会福祉法人連絡会設立
令和 5年11月15日	全国社会福祉協議会会長表彰受賞 （社会福祉協議会・民間社会福祉団体功労）　清水和枝氏
令和 6年11月26日	全国社会福祉協議会会長表彰受賞 （社会福祉協議会・民間社会福祉団体功労）　吉岡庸博氏
令和 7年 3月31日	玉来分所閉鎖 病児保育事業受託終了 菅生放課後児童クラブ事業受託終了 竹田市立久住保育所指定管理終了
令和 7年 4月 1日	公私連携型保育所「久住保育所」開始
令和 7年 4月29日	瑞宝単光章受章（社会福祉功労）　清水和枝氏

社会福祉法人竹田市社会福祉協議会組織図

（令和7年4月1日現在）



歴代会長

初代　(故)後藤　宗昭
任期　H17.4.1 ～ H19.3.31

二代目　髙橋　功
任期　H19.4.1 ～ H23.3.31

三代目　猪野　一男
任期 H23.4.1 ～ H27.3.31

四代目　野田　良輔
任期　H27.4.1 ～ R2.3.31

五代目　倉野　脩生
任期　R2.4.1 ～ R3.6.25

六代目　木部　眞里子
任期　R3.6.25 ～現在

歴代会長からのお祝いの言葉

二代目会長　髙橋　　功

竹田市社会福祉協議会合併20周年、おめでとうございます。

今から18年前、私が社会福祉協議会会長を引き受けて、地域社会の温かさと課題に深く向き合う日々を送っていました。特に印象深いのは、地域住民の方々との交流を通じて人と人の繋がりが持つ計り知れない力を実感しました。高齢化が少しずつ進み始めていた私たちの市は、一人暮らしの高齢者が増え、孤立が懸念されます。健康寿命をいかに伸ばしていくか、今思い出すと「デイサービス」でした。最初は遠慮がちだった皆さんも、温かいお茶、お菓子を囲むうちに、笑顔で談笑し始めました。「こんな場所を待っていました」「久しぶりにたくさん話せて嬉しい」そんな声が次々と聞かれ、私の胸は熱くなりました。特に忘れられないのは、いつも無口で、あまり感情を表に出さない方が、デイサービスで昔の歌を皆で歌った後に「楽しかった」とつぶやいたことです。その一言がこの活動のそのままです。「心配もありました。送迎時には何事もないように」

18年の歩みを振り返る今、私自身もデイサービスに通う世代になりました。当時、大変な時期に共に支えてくださった職員の皆さんに、今なお心から感謝しています。

「やさしく、思いやり」合言葉に歴代の役職員の皆さん、ご苦労様です。

これからの福祉行政のますますのご発展をお祈りいたします。

三代目会長　猪野　一男

お祝い

竹田市社会福祉協議会が誕生して今年で20周年という大きな節目を迎えられ心からお祝い申しあげます。当時と比べると社会情勢も大きく変わりました。平成21年当時社協の行う介護事業と言えば比較的介護度の低い要支援者や要介護の人達を対象に、デイサービスやホームヘルパーの派遣が主な事業でした。それが３年ごとの介護保険法の見直しにより医療と介護の連携、介護度の高い要介護者は介護サービス計画を基に、民間企業や農協、ＮＰＯ法人等幅広い事業者を巻き込んで地域全体で支え、比較的介護度の低い人は地域や家庭で見守り活動等を通じて支えるという地域包括ケアの仕組みへと変わりました。

そのため組織の改変、人材育成、各種社会福祉団体や各地区社協との連携強化に苦労したこと、ご迷惑をおかけしたことを記憶しています。

また、平成24年７月に竹田市を襲った豪雨災害で川が氾濫、竹田市文化会館を始め市内全域で災害が発生、多くの家屋の全半壊や死者が出ました。この時社協として初めて災害ボランティアセンターを市の総合運動公園に開設、県社協や国東、佐伯、豊後大野市等の社協の協力を受け、３日後の７月15日に災害ボランティアセンターを開設、７月28日までの14日間、個人や各種団体、市消防団、県内各地の消防団、ＤＭＡＴ等３千数百人のボランティアを受け入れ被災者のもとへ派遣、被災者の生活支援に当たり、無事災害ボランティアセンターを閉じる事が出来ました。こうした経験を通じて社会福祉協議会も自信へと繋がったと思います。

これからも常に市民に寄り添い、市民に愛され、頼りにされる竹田市社会福祉協議会を目指して益々発展されることをお祈りしてお祝いの言葉といたします。

四代目会長　野田　良輔

10年前のこと。つまり合併して10年目、合併前の旧四市町の時代からするともっと長い間、竹田市社協は信頼と実績を積み上げていた。私たちは、この信頼と実績を次世代へ繋げなければならなかった。介護保険制度の改正等を起因としたデイサービス事業や財務構造の見直し、暮らしのサポートセンターを構築してきた竹田市経済活性化促進協議会との統合、市立荻保育所の移管による荻げんきこども園の新設…様々なご意見や選択肢があったが、代々の工藤藤男・倉野脩生副会長、児玉誠三・渡部哲哉・志賀良雄事務局長をはじめ役職員の皆様とともに決断し、乗り越えてきた。

忘れられない言葉がふたつ、ある。

ひとつは、平成28年熊本地震のときのこと。竹田での避難所開設をひと月で終え、わが竹田市社協は、災害ボランティア運営のノウハウに精通していることもあり、被災著しい南阿蘇へ県境を越えて支援を始めた。３か月が経過し、この支援を撤退して本業へ戻ろうかと議論した。議論の中で、ある職員が心からの声を発した…「必要な限り続けたい」…彼には、やるべきこと、やれることが見えたのだ。私には、支援してきた意味が見えた。だから逆に安心して本業に戻れた感がする。今は、彼を含め社協職員の誰もが、竹田市民に必要な支援を進めているはずだ。

もうひとつは、「よっち話そう会」でのこと。職員で17地区ごとにチームを編成し、各地域で夜な夜な福祉懇談会を開いた。職員の熱意が地域に伝わっていた。市外・県外からの視察や参加も増えていた。ある会で霞が関の担当官がコメントした…「環境の厳しい竹田のはずなのに、不思議とみな前向きで明るい。日本の未来への希望を竹田で見つけた」…私たちは正しい途を選んできた。

竹田市社会福祉協議会の活動は、究極のまちづくりだ。これからも、竹田市民の生きる価値を支え続ける。合併20周年を機に、さらなるご活躍・発展を心から祈っている。

五代目会長　倉野　脩生

竹田市、荻町、久住町、直入町の１市３町の合併後、竹田市社会福祉協議会が立ち上がり早20年となりました。この節目の年を迎えるにあたり、改めて多くの皆様と共に過ごした貴重な時間を思い返し、感無量の思いでいっぱいです。私も髙橋会長の後を継いで、猪野会長とともに副会長として、様々な活動をして参りました。その中には竹田市災害のボランティア活動を職員にも従事してもらいましたが、その活動を見込まれ他県の熊本県の災害にも応援を要請されるほど、高い評価を頂きました。これもひとえに竹田市社協職員だからこそだと自負しております。竹田市社協の職員を誇りに思い、そのご苦労には心から感謝しております。私にとっても社協14年間はなくてはならない人生の福祉活動となりました。リスクある薬より副作用のない笑顔での福祉活動に…

全国に知られた竹田市社協の福祉活動は高齢者にはなくてはならないものとなっております。人生は福祉がなくては生きていけません。どうぞ竹田市社協の皆さん、誇りをもってその温かい手を差し伸べていって下さい。

現在、私は会長職を退任しておりますが、後任の新会長のもとで、今後も社会福祉協議会がさらに成長し、地域社会に貢献し続けていくことを心から願っております。

最後に、今後も地域福祉の充実に向けて、皆様と力を合わせていくことを切に願い、私からの挨拶とさせて頂きます。これまでのご支援に感謝するとともに、今後とも社会福祉協議会の活動に変わらぬご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

役　員　名　簿

社会福祉法人 竹田市社会福祉協議会役員名簿（平成17年～令和７年）

年　度	会　長	副会長	理　　事	監　事
平成17	後藤　宗昭	櫻井忠宣 安井啓介 伊藤隆弘	髙橋功、吉弘央、小森茂、佐藤一夫、菅十郎、原眞治、山村菊義、阿孫眞博、首藤義見、加藤和子、杉井忠重、森田良雄、梶原光、伊藤恭、仁部屋信雄、河野初男 （新宮正臣、大久保文夫）	廣瀬正熙 渡邊文夫 宇田泰敏 甲斐孝康 （松田重男）
平成18	後藤　宗昭	櫻井忠宣 安井啓介 伊藤隆弘	髙橋功、吉弘央、小森茂、佐藤一夫、菅十郎、原眞治、山村菊義、阿孫眞博、首藤義見、加藤和子、杉井忠重、森田良雄、梶原光、伊藤恭、新宮正臣、大久保文夫 （吉野幸一、堀一壽）	廣瀬正熙 渡邊文夫 宇田泰敏 松田重男
平成19	髙　橋　　功	杉井忠重	加藤正義、眞井幸雄、加藤和子、吉弘央、小森茂、安井啓介、大塚干一、櫻井忠宣、堀一壽、吉野幸一、岡崎周、村田忠士 （佐田亨、佐藤英俊、倉野脩生、佐藤了亮、渡邊文夫）	廣瀬正熙 宇田泰敏
平成20	髙　橋　　功	杉井忠重	加藤正義、加藤和子、吉弘央、小森茂、安井啓介、大塚干一、櫻井忠宣、佐田亨、佐藤英俊、倉野脩生、佐藤了亮、渡邊文夫 （志賀三士郎、佐藤一夫、吉岡幸二、甲斐貴良）	廣瀬正熙 宇田泰敏
平成21	髙　橋　　功	杉井忠重	渡邊文夫、倉野脩生、志賀三士郎、伊藤寿和子、佐藤一夫、成安仲儀、森永國治、加藤正義、吉弘央、佐田亨、吉岡幸二、甲斐貴良 （佐伯次人、後藤光明）	宇田泰敏 佐藤征年
平成22	髙　橋　　功	杉井忠重	渡邊文夫、倉野脩生、志賀三士郎、伊藤寿和子、佐藤一夫、成安仲儀、森永國治、加藤正義、吉弘央、佐田亨、佐伯次人、後藤光明 （後藤誠、小田雅文）	佐藤征年 田尻純一

年　度	会　長	副会長	理　　事	監　事
平成23	猪野　一男	倉野脩生	佐藤一夫、福田光明、伊藤寿和子、吉弘央、小田雅文、古井久和、成安仲儀、吉野幸一、後藤誠、佐伯次人、加藤正義 （志賀三士郎、後藤英一、渡辺龍太郎）	氏田民夫 田尻純一
平成24	猪野　一男	倉野脩生	佐藤一夫、福田光明、伊藤寿和子、吉弘央、小田雅文、古井久和、成安仲儀、吉野幸一、後藤誠、志賀三士郎、後藤英一、渡辺龍太郎 （村田忠士、小野昭生、柏木良和、佐田啓二）	氏田民夫 田尻純一
平成25	猪野　一男	佐藤一夫	福田光明、佐藤竹尾、小野昭生、加藤隆子、吉弘央、小田雅文、村田忠士、吉野幸一、後藤誠、柏木良和、佐田啓二、倉野脩生 （丹統司、大塚幸憲、添田紀夫）	氏田民夫 田尻純一
平成26	猪野　一男	佐藤一夫	佐藤竹尾、加藤隆子、吉弘央、小田雅文、村田忠士、吉野幸一、柏木良和、佐田啓二、倉野脩生、丹統司、大塚幸憲、添田紀夫 （菊池博文、吉村政文、早川和）	氏田民夫 田尻純一
平成27	野田　良輔	工藤藤男	佐田啓二、添田紀夫、佐藤一夫、吉村正文、伊藤寿和子、吉弘央、早川和、倉野脩生、工藤房士、志賀紘一、佐々木周二、 （阿部雅彦、菅清春、丹統司）	氏田民夫 児玉龍明
平成28	野田　良輔	工藤藤男	添田紀夫、伊藤寿和子、吉弘央、早川和、倉野脩生、工藤房士、志賀紘一、佐々木周二、阿部雅彦、菅清春、丹統司	氏田民夫 児玉龍明
平成29	野田　良輔	倉野脩生	吉岡曉督、吉弘央、児玉誠三、川村岳人	氏田民夫 児玉龍明 （後藤俊治）
平成30	野田　良輔	倉野脩生	吉岡曉督、吉弘央、大石裕子、川村岳人、吉崎昌宏、児玉誠三	児玉龍明 後藤俊治

年　度	会　長	副会長	理　　事	監　事
平成31	野田　良輔	倉野脩生	吉岡曉督、吉弘央、大石裕子、川村岳人、吉崎昌宏、児玉誠三 （添田紀夫）	児玉龍明 後藤俊治 （岩屋千利） （都築員守）
令和2	倉野　脩生	吉岡曉督	添田紀夫、大石裕子、吉崎昌宏、児玉龍明、野田良輔、川村岳人	岩屋千利 都築員守
令和3	倉野　脩生 （木部眞里子）	吉岡曉督	添田紀夫、大石裕子、吉崎昌宏、児玉龍明、野田良輔、川村岳人 （土居昌弘、加藤和子、工藤厚憲）	岩屋千利 都築員守
令和4	木部眞里子	吉岡曉督	加藤和子、添田紀夫、児玉龍明、工藤厚憲、土居昌弘	岩屋千利 都築員守 （佐々木成二）
令和5	木部眞里子	吉岡曉督	加藤和子、添田紀夫、児玉龍明、工藤厚憲、土居昌弘、得丸高志	都築員守 佐々木成二
令和6	木部眞里子	吉岡曉督	加藤和子、添田紀夫、児玉龍明、工藤厚憲、土居昌弘、得丸高志	都築員守 佐々木成二
令和7	木部眞里子	佐々木成二	添田紀夫、児玉龍明、工藤厚憲、得丸高志、土居昌弘 （古森佳代）	都築員守 吉野健一

※（氏名）につきましては年度内に就任された方です。

評　議　員　名　簿

社会福祉法人 竹田市社会福祉協議会評議員名簿（平成17年～令和７年）

年　度	評　　議　　員
平成17	菅嘉克、佐藤次男、羽田野久明、眞井幸雄、工藤ヒデ子、工藤義光、河室龍二、菊池武士、長松敏幸、佐藤忠士、甲斐正章、後藤道雄、中島典浩、藤原誠司、西村秀明、鶴林仲雄、安藤裕子、吉野初美、清水順子、後藤和文、井むね子、衛藤俊文、足達保之、佐藤秀明、高橋弘髙、麻生ケサエ、羽田野浩士、足達千鶴子、後藤吉基、楳木日出行、吉竹勇次、志賀誠治、後藤正元、吉野純子、秦一見、後藤博文、工藤八佐子、熊田洋子、日元幸江、合原弘貴、松田重男、首藤正光、大久保寿和、大塚満江 （酒井耕、大塚哲夫、村田忠士、永富英雄、後藤敬吾、阿南善五、今永源士、菅由紀男、佐藤よし子、宮崎洋子、菅コトヨ、盛長光子、吉野美保子）
平成18	菅嘉克、佐藤次男、眞井幸雄、工藤ヒデ子、工藤義光、河室龍二、菊池武士、長松敏幸、佐藤忠士、甲斐正章、西村秀明、吉野初美、衛藤俊文、高橋弘髙、麻生ケサエ、羽田野浩士、足達千鶴子、後藤吉基、楳木日出行、吉竹勇次、志賀誠治、後藤正元、吉野純子、秦一見、後藤博文、工藤八佐子、熊田洋子、日元幸江、合原弘貴、首藤正光、大塚満江、酒井耕、大塚哲夫、村田忠士、永富英雄、後藤敬吾、阿南善五、今永源士、菅由紀男、佐藤よし子、宮崎洋子、菅コトヨ、盛長光子、吉野美保子 （佐藤冨士夫、本田純一、野尻英二）
平成19	小代一幸、佐藤一夫、工藤義光、吉岡アキエ、渡邊文夫、西村貴雄、首藤義見、楳木日出行、熊田洋子、後反田加代子、西村秀明、首藤和義、佐藤冨士夫、志賀三士郎、首藤忠徳、伊藤寿和子、志賀克洋、椎原文夫、盛長光子、志賀静哉、田北良一、森恒範、甲斐正章、布施睦子、海老納眞則、古林義幸、羽田野浩士、首藤正光、志賀良雄、 （稗田義光、羽田野秀夫、近藤富夫、伊藤義文、川口晃生、石井猛夫、阿南滝子、秋重壯一、後藤吉基、甲斐冬松、佐藤美智江）
平成20	小代一幸、佐藤一夫、吉岡アキエ、楳木日出行、志賀三士郎、伊藤寿和子、椎原文夫、盛長光子、志賀静哉、田北良一、森恒範、布施睦子、海老納眞則、古林義幸、羽田野浩士、志賀克洋、首藤正光、志賀良雄、稗田義光、羽田野秀夫、近藤富夫、伊藤義文、川口晃生、石井猛夫、阿南滝子、秋重壯一、後藤吉基、甲斐冬松、佐藤美智江 （大久保泉、竹内俊一、佐藤精治、阿孫眞博、佐藤竹尾、渡邉由美子、藤田美沙子、倉原邦夫）
平成21	土居昌弘、大久保泉、福田光明、吉岡アキエ、阿南徹治、江藤守久、石井猛夫、秋重壯一、足達千鶴子、佐藤美智江、田部利武、竹内俊一、佐藤精治、阿孫眞博、佐藤竹尾、加藤和子、渡邉由美子、椎原文夫、盛長光子、志賀静哉、田北良一、岩屋庄一、川口晃生、藤田美沙子、海老納眞則、古林義幸、羽田野浩士、佐々木周二、倉原邦夫 （伊藤孝信、小野幹雄、早川和、向井雄二郎、麻生丹、甲斐精一）

年　度	評　　議　　員
平成22	福田光明、吉岡アキヱ、阿南徹治、江藤守久、石井猛夫、秋重壯一、足達千鶴子、佐藤美智江、田部利武、加藤和子、渡邉由美子、椎原文夫、盛長光子、志賀静哉、田北良一、岩屋庄一、川口晃生、藤田美沙子、海老納眞則、古林義幸、羽田野浩士、佐々木周二、倉原邦夫、伊藤孝信、小野幹雄、早川和、向井雄二郎、麻生丹、甲斐精一 （佐藤冨士夫、工藤忠文、佐藤美智子、後藤聡）
平成23	伊藤孝信、小野幹雄、秦今朝富、田部憲治、添田紀夫、内田雄一、甲斐基史、大塚英子、衛藤賢美、大久保良子、田部利武、浅倉文親、渡邉由美子、椎原文夫、盛長光子、志賀静哉、田北良一、倉原準一、衛藤慎二、佐藤美智子、海老納眞則、秋重壯一、羽田野浩士、佐々木周二、後藤聡 （佐藤竹尾、早川和、佐藤冨士夫、内柳勇、大久保金光、進正直、本田忠、秋本禮子）
平成24	小野幹雄、秦今朝富、添田紀夫、内田雄一、甲斐基史、大塚英子、衛藤賢美、大久保良子、浅倉文親、渡邊由美子、椎原文夫、盛長光子、田北良一、倉原準一、衛藤慎二、佐藤美智子、海老納眞則、秋重壯一、羽田野浩士、佐々木周二、後藤聡、佐藤竹尾、早川和、佐藤冨士夫、内柳勇、大久保金光、進正直、本田忠、秋本禮子 （福澤皓一、大久保正三、小野一郎、山村孝二）
平成25	本田忠、小野幹雄、秦今朝富、秋本禮子、添田紀夫、勘藤清美、甲斐基史、大塚英子、衛藤賢美、甲斐冬松、早川和、佐藤冨士夫、福澤皓一、大久保正三、浅倉文親、渡邉由美子、椎原文夫、盛長光子、進正直、小野一郎、小代京子、衛藤慎二、佐藤美智子、海老納眞則、秋重壯一、吉村政文、佐々木周二、山村孝二 （藤田信雄、松村敏明、興梠開、若山章、首藤忠徳、秋岡親友、工藤藤男、佐田繁子、後藤淳一、渡邉征士、三好隨義、大塚信一）
平成26	本田忠、秦今朝富、秋本禮子、衛藤賢美、浅倉文親、渡邉由美子、椎原文夫、進正直、小野一郎、小代京子、衛藤慎二、佐藤美智子、海老納眞則、秋重壯一、吉村政文、佐々木周二、山村孝二、藤田信雄、松村敏明、興梠開、若山章、首藤忠徳、秋岡親友、工藤藤男、佐田繁子、後藤淳一、渡邉征士、三好隨義、大塚信一 （峯田義光、下城広士、脇田安則、筑紫聡、河野豊、加藤いつ子）
平成27	本田忠、大久保實雄、秦今朝富、秋本禮子、佐田繁子、廣瀬庄子、渡邉征士、後藤道雄、衛藤賢美、大塚信一、藤田信雄、峯田義光、下城広士、脇田安則、小野一郎、加藤隆子、渡邉由美子、梶原光、髙橋美代子、進正直、小代京子、衛藤慎二、吉岡アキヱ、海老納眞則、秋重壯一、伏田誠一、佐藤市蔵 （渡辺克己、足立孝夫、阿南高範、菅勲、荒牧洋一、秋岡成久、加藤いつ子、伊藤勝徳、白石健一）
平成28	伊藤勝徳、白石健一、加藤和子、大久保實雄、秦今朝富、秋本禮子、佐田繁子、廣瀬庄子、渡邉征士、後藤道雄、衛藤賢美、大塚信一、加藤隆子、渡邉由美子、梶原光、髙橋美代子、進正直、小代京子、衛藤慎二、吉岡アキヱ、海老納眞則、伏田誠一、佐藤市蔵、渡辺克己、足立孝夫、阿南高範、荒牧洋一、秋岡成久、加藤いつ子 （本郷敦子、佐藤慶一、杉井忠重、甲斐秀一、加藤幸子、加藤誠）

年　度	評　　議　　員
平成29	阿部雅彦、工藤藤男、吉野秀俊、菅清春、丹統司、加藤和子、渡邉由美子、髙橋美代子、加藤誠、板井良助、吉岡アキヱ、早川和 （加藤正義、足立孝夫、白井幸光、佐藤龍太、三好健次、佐藤一夫、大久保實雄）
平成30	吉野秀俊、加藤和子、渡邉由美子、髙橋美代子、加藤誠、板井良助、吉岡アキヱ、加藤正義、足立孝夫、白井幸光、佐藤龍太、三好健次、佐藤一夫、大久保實雄 （古森佳代、山村明）
令和元	吉野秀俊、加藤和子、渡邉由美子、髙橋美代子、加藤誠、板井良助、吉岡アキヱ、加藤正義、足立孝夫、白井幸光、佐藤一夫、大久保實雄、古森佳代、山村明 （河野豊、合澤秀長、河邉和義、姫野武俊、後藤純平、阿南哲也）
令和2	吉野秀俊、加藤和子、渡邉由美子、板井良助、吉岡アキヱ、加藤正義、佐藤一夫、大久保實雄、古森佳代、河野豊、合澤秀長、河邉和義、姫野武俊、後藤純平、阿南哲也 （河野真理子、小出直喜、大塚智子、後藤群逸、村田忠士）
令和3	加藤和子、渡邉由美子、板井良助、加藤正義、大久保實雄、河野豊、河邉和義、姫野武俊、阿南哲也、河野真理子、小出直喜、大塚智子、後藤群逸、村田忠士（中城賢一、阿南智博、今村善次、髙橋英明、白石誠志郎、吉野聖子、伊藤寿和子、奥結香、渡邉一宏、佐藤一夫、大久保實雄）
令和4	阿南智博、中城賢一、今村善次、伊藤寿和子、河邉和義、奥結香、吉野聖子、渡邉一宏、河野真理子、佐藤一夫、髙橋英明、大久保實雄、阿南哲也、白石誠志郎 （柴田徹、吉野秀樹、羽田野麗子、後藤英一、白井幸光）
令和5	今村善次、伊藤寿和子、奥結香、吉野聖子、渡邉一宏、河野真理子、後藤英一、白井幸光 （賀籠六めぐみ、吉野英勝、小野光一、相馬久則、松岡賢宏、佐藤愛朗）
令和6	今村善次、伊藤寿和子、奥結香、吉野聖子、渡邉一宏、河野真理子、後藤英一、白井幸光、賀籠六めぐみ、吉野英勝、小野光一、相馬久則、松岡賢宏、佐藤愛朗 （菊地玉喜、佐藤愛朗、武石愛恵）
令和7	佐藤美樹、吉野英勝、白井幸光、和田安敏、相馬久則、伊藤寿和子、奥結香、今村善次、吉野聖子、渡邉一宏、河野真理子、菊地玉喜、内藤紘昭、武石愛恵 （伊藤誠至、佐藤一夫、井誠一郎）

※（氏名）は年度内に就任された方です。

事　業　編

PROJECT

地区社会福祉協議会活動

目的

地区社会福祉協議会（以下：地区社協）活動は、地域住民同士が自分たちの住んでいる地域の生活課題の解決に向け、住民相互の協力や専門機関との連携により、誰もが安心して暮らし続けることのできる地域づくりを主体的に進めています。公的制度だけでは行き届かない課題にも対応し、地域全体の福祉の向上をめざしています。

内容

地区社協は、旧竹田地域（12地区）では平成６年４月に設立され、旧３町では合併後、荻地域で平成21年７月に設立、都野地域で平成24年１月に設立、久住地域・白丹地域で平成24年３月に設立、直入地域で平成25年７月に設立されています。現在竹田市では、旧小学校区圏域を日常生活圏域（17地区）とみなし、地区社協が主体となって、地域の支え合いを作り出していく話し合いの場を設け、地域にある様々な団体が連携しながら、地域課題を解決していく取り組みを進めています。また、それぞれの地区社協ごとに地区福祉ビジョンを作成して、継続的に活動しています。

●見守り・気づき・つながる活動

民生委員児童委員・福祉委員等の合同研修会を開催し、連携に向けてお互いの役割を知り、ささえあい台帳や見守りマップを活用した見守り体制の構築を図っています。愛育保健推進員や自治会長を交えて話し合いを行う地区もあります。

玉来地区福祉懇談会の様子

竹田地区三者合同会議の様子

●集まる場づくり

地域課題の抽出や解決に向けて、住民が集まって話をする場として「よっちはなそう会」を開催しています。敬老会や多世代交流会など、地域住民が参加しやすい行事を開催し、顔の見える関係づくりを進めています。

よっちはなそう会の様子

i-meiji多世代交流会の様子

コミュニティまつもっと健寿会の様子

生活支援体制整備事業

目的

生活支援体制整備事業は、高齢になっても住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるよう、地域の支え合いの仕組みを整えることを目的としています。住民、地域団体、関係機関等が連携し、見守りや生活支援、介護予防につながる取り組みを進めることで、地域の実情に応じた支援の仕組みづくりを推進しています。

内容

竹田市では平成27年度から高齢者の生活に必要な生活支援サービスを地域の住民と協力して充実させ、資源開発を円滑に進めるため、生活支援体制整備事業に取り組んでいます。生活支援コーディネーターの配置を竹田市経済活性化促進協議会に委託し、地域包括支援センターや社会福祉協議会と連携しながら、取り組みを推進する協議体の設置を進めてきました。平成30年４月からは、本会が事業を引き継ぎ、取り組みを推進しています。

●生活支援コーディネーター

生活支援コーディネーター（SC）は、高齢者の生活支援等サービスの基盤整備を推進していくため、地域における既存の取り組みや組織などを活用しながら、生活支援等サービスの資源開発や提供主体間のネットワークの構築などを行うことを目的としています。

市全域を「第１層」、日常生活圏域（17地区）を「第２層」と位置付けてSCを配置しています。令和６年度からは地域住民の中から選出したSCを配置しています。

●第１層協議体

第１層協議体「ささえあいネット」は、令和６年度までは委員会型で年３回定例で開催をしてきましたが、令和７年度からはテーマに合わせて随時必要な関係者を招集して開催しており、令和７年度のテーマを「男性が家事を学べる機会の提供」としました。料理経験のない男性でも作れるレシピを考え、職員によるクッキング動画を撮影しました。ケアマネやヘルパーに動画を提供して必要な方に届けていただいたり、今回はご協力をいただいたマルショク竹田本町店にレシピを掲示しています。

●第２層協議体

日常生活圏域において、地区社協を中心に地域住民・関係機関が協働して、「地域の困りごと」を自分たちの地域で解決していく体制づくり（よっちはなそう会等開催の支援）を行っています。

●資源開発（ひまわりの会・だんだん会の立ち上げ）

地域ケア会議の事例から「パーキンソン病患者の会が竹田にあるとよい」という地域課題があがり、ＳＣが関係機関に調整し、令和４年７月にパーキンソン病患者交流会『ひまわりの会』の立ち上げに至りました。パーキンソン病の方やその家族がお互いに励まし合い、支え合いながら、心とからだの健康を保持し、交流や学習会を行なうことを目的に２か月に１回開催しています。令和４年度は当事者２名の参加でしたが、令和５年度は５名、令和６年度以降は12名と輪が広がり、令和７年度は家族や関係者を入れると毎回２５名を超えるほど大所帯となっています。内容も勉強会を始め、茶話会やレクリエーション、体操など行い、ゆっくりと話してもらう雰囲気づくりを心がけています。

菅生地区では「通いの場が少ない」「担い手が不足している」という地域課題や、地域の方からは「顔を合わせる機会がなくなった」「みんなでお酒を飲む場があるといいなあ」といった声もあったことから、男性つどいの場「だんだん会」が発足しました。毎月第２木曜日午後６時に集まっています。

ささえあいネット（第1層協議体）
～料理未経験の男性でもできる簡単レシピ～

ひまわりの会活動の様子

だんだん会の様子

●地域共生社会実現フォーラム

平成27年７月に竹田市とさわやか福祉財団が「包括連携協定」を締結し、「新しい地域支援のあり方を考えるフォーラムin竹田」を開催しました。フォーラムの開催にあたって、行政と社会福祉協議会、経済活性化促進協議会で実行委員会を立ち上げたことがきっかけとなり、フォーラム後には、実行委員会のメンバー＋αで「新しい地域ささえあい推進会議」が発足し、高齢者にかかわる分野が定例的に集まって話をする場ができました。現在も「地域共生社会実現会議」へと発展し、庁内連携が充実しています。コロナ禍においては、人が集まって何かをすることが難しく、地域の活動も停滞気味となりましたが、令和５年度に市内を８ブロックに分けて地域共生社会実現フォーラムを開催し、地域づくりの気運の再構築を図りました。竹田市では、いつまでも住み慣れた地域で安心して、子どもから高齢者まで地域を超えてつながり、互いに支え合い、助け合いながら暮らすことができる「地域共生社会」の実現を目指し、よっちはなそう会やフォーラムを通して、先進事例を学び、住民同士のつながりの強化や支え合い活動の推進に取り組んでいます。

年度	日付	内　　容
令和７	７月26日	報告①コミュニティまつもっとの取り組み 報告②白丹丸山自治会の取り組み 講演：「“ごちゃまぜ”“インフォーマル”“コンパッション”を合言葉に居場所をつくる！地域生活を支える！住む場所を創出！～ 20年後も暮らせる地域を創る～」 講師：合同会社えがお　代表　山内勇人氏

フォーラムの様子

●ボランティア人材発掘実態調査

ボランティアの人材が不足していることから、竹田市在住の60歳以上75未満の高齢者を対象（令和４年度～令和５年度は、65歳以上75歳未満）に住民主体の助け合い活動の担い手発掘を目的とした調査を実施しています。調査は主に福祉委員に依頼し、アンケートの配布から回収まで協力いただき、回収率をあげています。調査後は、地域づくりしんけんチーム員が個別に聞き取り調査を行い、地域活動へとつないでいます。令和９年度をもって市内全域の調査を終了します。

実施状況

年度	地域	調査対象者	調査対象者数	有効回収数	有効回収率	活動意向者数	聞き取り調査後活動意向者	活動につながった方
令和4	久住	65～74歳	740	407	55.0	22	—	4
令和5	荻	65～74歳	548	310	57.0	61	35	21
	直入		434	228	53.0	33	8	2
令和6	入田	60～74歳	132	84	63.6	14	6	4
	嫗岳		103	57	55.3	18	6	5
	宮砥		130	88	67.6	24	3	1
	宮城		162	75	46.3	23	7	1
	城原		219	116	53.0	31	5	2
令和7	玉来	60～74歳	463	407	87.9	93	調整中	調整中
	松本		246	227	92.3	72		
	菅生		166	159	95.8	39		

●ささえあいボランティア養成講座

平成23年から平成25年は、地域住民にボランティア活動のきっかけづくりと活動の場を提供することを目的にボランティア養成講座を開催しています。暮らしのサポートセンター等住民主体のボランティア活動が広がり、ボランティアニーズが高まる中、活動する人材の育成を目的に令和元年からボランティアの基礎を学ぶ「基礎編」と様々なボランティアを学ぶ「専門編」を開催し、ボランティア活動に意欲のある方や人材発掘実態調査から発掘された方へ学びの機会を提供しています。

「竹田市の現状について」（基礎編）

救急救命講座の様子

福祉委員活動

目的

福祉委員は、日常的なご近所づき合いを基本に見守り・声かけ活動を行い、日頃から地域の高齢者の困りごとに気を配り、問題の早期発見・早期対応につなげるため、民生委員児童委員や自治会長と協力して、安心して暮らせる地域にすることを目的に設置しています。

内容

福祉委員は、社会福祉に強い関心と深い理解・熱意を有する方で各自治会長から推薦された方を竹田市社会福祉協議会会長が委嘱をしています。平成19年度から各自治会または概ね30世帯から50世帯に１人の割合で配置しており、任期は２年間となっています。令和7年度は298名の方に委嘱しています。

●福祉委員研修の開催

福祉委員としての役割を伝えるために、福祉委員研修会の開催や見守り活動が円滑に行えるように見守り記録票の整備を行っています。

福祉委員研修会については、地区社協の総会や会合の際に合わせて開催をしてきましたが、地域の要となる福祉委員の役割をしっかりと伝える必要があるということから令和６年度に「福祉委員手引き」を作成し、令和７年度は福祉委員研修会を７ブロックに分けて開催しました。

ブロック別福祉委員研修会の様子

●福祉委員の活動

地区によっては、福祉委員が毎月月末に見守り訪問を行い、生活の様子を民生委員児童委員へ報告する見守り活動を行っているところもあります。また、自治会内で月1回民生委員児童委員と自治会長、福祉委員で地域の見守り活動を行うところもあります。地区社協の配食サービス等の事業に見守り活動の一環として協力しています。

配食サービスの様子

ボランティアセンター（災害ボランティア活動）

目的

有事に備えて、常日頃から災害に対する備えや災害ボランティアセンターの運営及び活動体制に向けて強化を図っています。

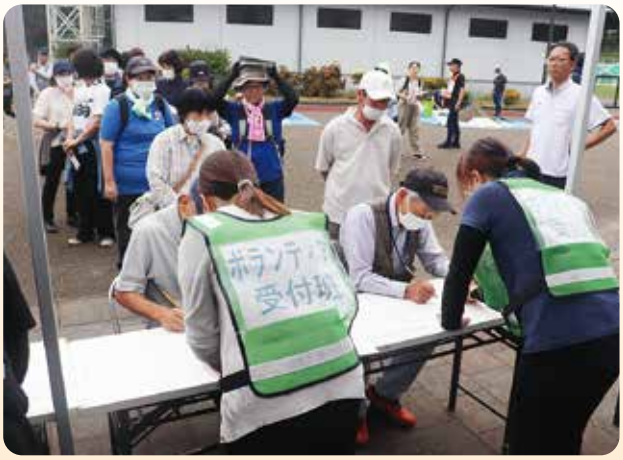
内容

平成24年７月に発生した九州北部豪雨災害（以下：平成24年水害）を経験し、初めて災害ボランティアセンターを設置、運営しました。平成24年７月15日～７月28日までの14日間、規模縮小して７月30日～８月９日までの11日間、延べ3,631名のボランティアを受け入れ、延べ304件の支援活動を行いました。

平成28年４月14日に発生した熊本地震では、旧荻町役場跡地に竹田ベースキャンプを開設し、南阿蘇村への支援活動を行いました。県境を越えての後方支援は、５月１日～７月31日まで48日稼働の間、全国40都道府県から延べ1,991名のボランティアを南阿蘇村へとつなぎました。平成24年水害の教訓及び南海トラフ地震等の備えとして、平成27年度に「竹田市災害ボランティアネットワーク協議会」を設立し、平時から研修の開催などを通して情報交換を行いながら緊急時の支援体制の確立を図っています。また、職員の資質向上を目的に災害ボランティアセンター設置・運営訓練を毎年実施しています。

九州ブロック社会福祉協議会災害時相互応援協定や大分県市町村社協相互応援協定により被災地災害ボランティアセンターへ職員を、平成29年７月九州北部豪雨災害（日田市・佐伯市・東峰村）17名、令和元年８月豪雨災害（多久市）４名、令和５年７月九州北部豪雨災害（久留米市）１名、令和６年能登半島地震（珠洲市）２名、令和７年佐賀関大規模火災２名派遣しました。

今後予想される大規模災害時において、被災者一人ひとりの生活や心身の状況に配慮した福祉支援の充実を図るため、令和６年度からDWAT（災害派遣福祉チーム）の研修の受講を進め、現在８名が登録しています。



災害ボランティアセンター運営訓練（災害ボランティアネットワーク協議会との連携）

ボランティアセンター（ボランティア活動）

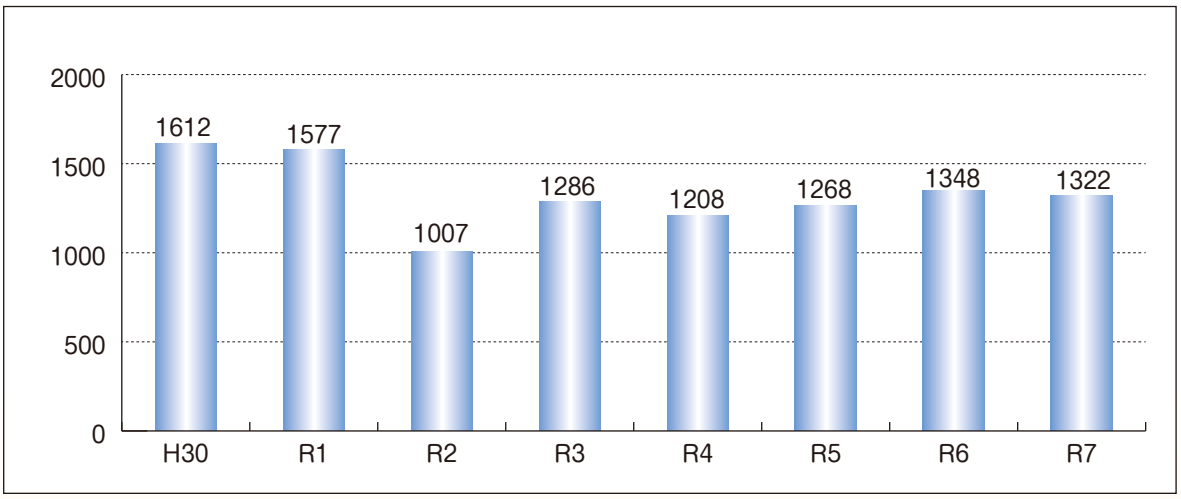
目的

地域福祉活動の担い手となるボランティアの人材育成を行うとともに、市内で活動している各種ボランティア団体の支援を行っています。

内容

竹田市ボランティアセンターでは、地域福祉を担う人材確保、育成の観点からささえあいボランティア講座（基礎編・専門編）を開催し、ボランティアの発掘と学びの機会を提供しています。基礎編を終了した方には、社協登録ボランティアとして登録を勧め、活動の支援を目的にフォローアップ研修等行っています。ボランティア活動団体の把握や支援を行い、ボランティア活動をしたい方とボランティアを必要とする団体のマッチングを行っています。また、安心してボランティア活動が行えるよう、ボランティア活動保険の加入を促進しています。

ボランティア活動者の推移



福祉教育活動

目的

義務教育の時期から福祉教育を推進し、子どもや住民が福祉に関心をもち、他者への思いやりや協力の精神を育み、支え合う地域づくりに努めています。

内容

市内の全小中学校をボランティア協力校として指定し、花いっぱい運動や地域清掃活動、地域との交流事業などのボランティア活動を通して、福祉の心を学ぶ機会を提供しています。夏のボランティア体験事業では、毎年７月から８月をボランティア体験月間として、生徒・学生及び社会人等がボランティア活動に参加・体験できる機会を設けています。さらに、福祉教育の新たな取り組みとして、本会オリジナルの「ふくしすごろく」を活用し、市内の小学校において児童が楽しみながら社会福祉協議会の役割を学び、地域福祉への理解を深められるよう、令和８年度に向けて検討しています。

社会福祉法人連絡会

目的

竹田市内の社会福祉法人同士が情報を共有し、連携・協力を深めることで、地域福祉の向上を図っています。

内容

令和５年度に社会福祉法人連絡会を設立し、会員相互のネットワークづくりと職員のスキルアップのための合同研修会を開催しています。令和５年度は総会並びに研修会を２回開催しました。令和５年度の取組としては有限会社グリーンファーム久住様から寄贈を受けた卵を各法人へ配分しました。令和６年度は、業務の効率化と竹田市の子育て環境と就労支援の取組について研修を実施し、社会福祉法人の連携と強化に向けて取り組んでいます。今後も、地域共生社会の在り方検討会等、国の動向を見据えて、社会福祉法人の連携・協働を推進していきます。

○研修会開催

年度	日付	研　修　内　容
令和5	2月7日	①外国人技能実習生受け入れ事業等に係る直近の動向 ②就労準備支援事業について
	3月12日	社会福祉法人豊心の里の取り組み 外国人人材の発掘、移住定住法人、農福連携事業について
令和6	7月26日	社会福祉法人致知会養護老人ホームあそ上寿園の取り組み 「業務の見える化」について
	3月25日	竹田市の子育て環境について 子ども支援と就労支援の取り組み
令和7	2月18日	福祉職場の人事労務に関するお悩みや困り事について

竹田市社会福祉法人設立総会の様子

○加入法人：竹田市内で福祉サービスを運営している社会福祉法人（11法人）

愛の園福祉会
孝寿福祉会
小羊保育園
法栄会
豊和会
偕生会
偕倖社
博愛会
やまなみ福祉会
雄仁会
竹田市社会福祉協議会

（令和７年12月現在）

生活困窮者自立支援事業

（自立相談支援事業、就労準備支援事業、家計改善支援事業、被保護者就労支援事業、被保護者就労準備支援事業）

目的

経済的に困窮し、最低限度の生活を維持できなくなる恐れのある方に対して、自立の促進を図ることを目的として個々の状況に応じた支援を行なっています。

内容

平成26年８月に生活困窮者自立促進支援モデル事業を受託し、平成27年４月以降は本事業となる自立相談支援事業を受託して生活困窮者に対する相談支援に努めてきました。

平成30年度からは、就労準備支援事業、家計改善支援事業、被保護者就労支援事業、被保護者就労準備支援事業を一体的に市から受託し相談支援に努めています。

自立相談支援事業

内容

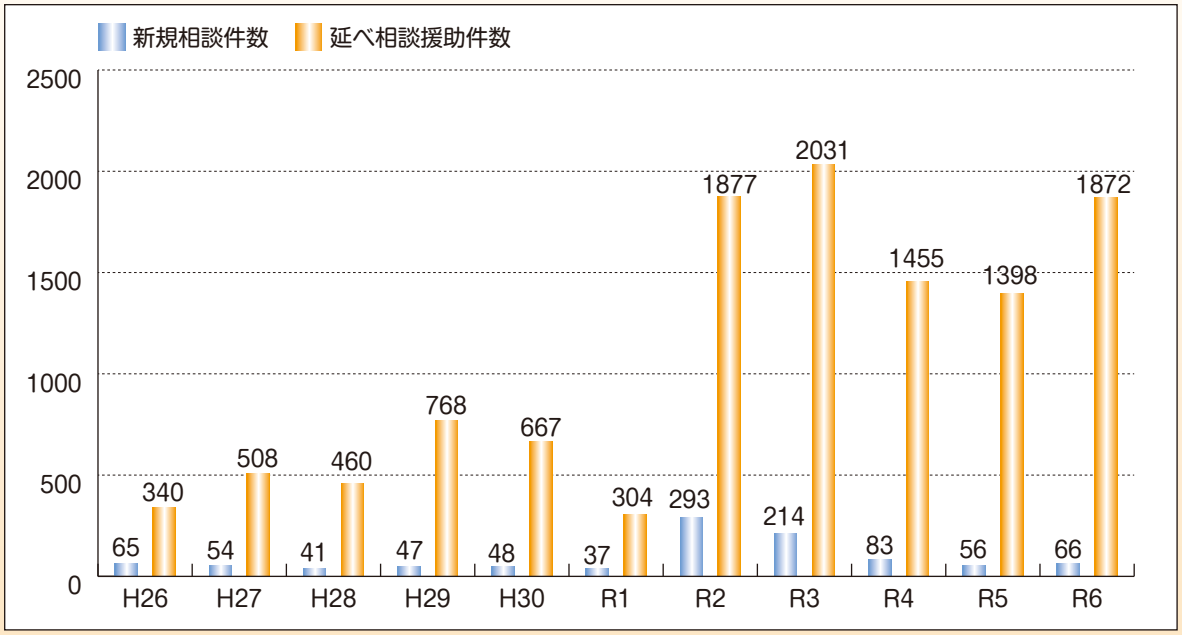
広く相談を受け止めたのち、関係者・関係機関との連携と、おおいたくらしサポートやフードバンクおおいた等の活用、既存の支援メニュー（生活福祉資金、フードバンク等）を利用しながら必要な支援を届けています。

特に、令和２年からのコロナ禍においては、失業や休業・休職等による就労環境の変化等もあり、これまで福祉の相談に関わりの少なかった相談者からの相談支援も多くなり、その間はコロナ対策支援を中心に支援を行なってきました。また、その後の生活についても、フォローアップを行っています。

今後、竹田市版フードバンク・フードドライブについては、必要な方への支援が届きやすくするためにも仕組みづくりを行なっていきます。

実績

利用者数の推移：自立相談支援



地域福祉事業

就労準備支援事業、被保護者就労支援事業、被保護者就労準備支援事業

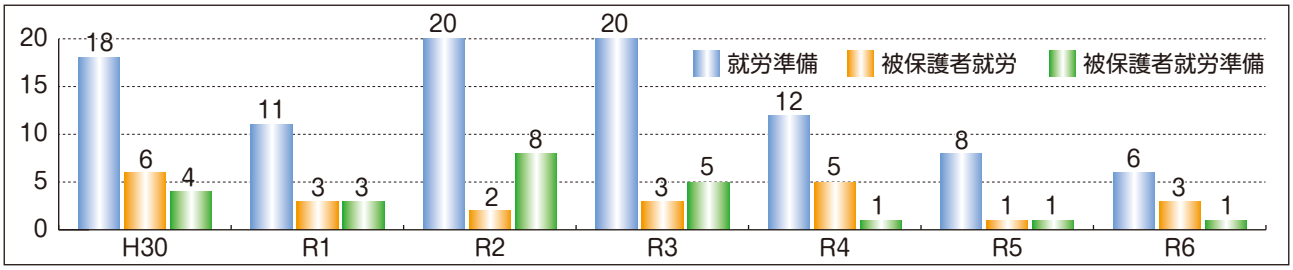
内容

被保護者就労支援では被保護者を対象に一般就労支援を行ない、就労準備支援・被保護者就労準備支援では被保護者又は経済的困窮者等を対象に一般就労に向けた体験や訓練を通して就労支援を行なっています。

経済的自立や社会参加に向けて相談者に応じた就労支援を行ないながら、ハローワークや無料職業紹介事業の協力を得て、就職セミナーや地元企業とのマッチングの場として合同企業就職相談会を開催するなど、就労に向けた取り組みを行っています。

実績

利用者数の推移：就労準備支援、被保護者就労支援、被保護者就労準備支援



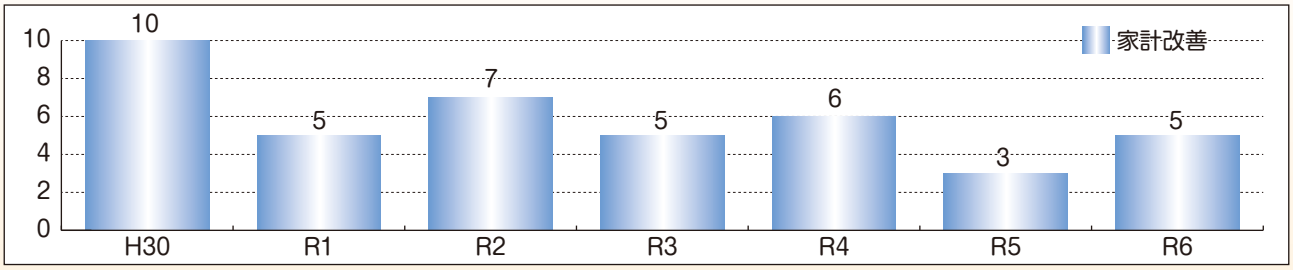
家計改善支援事業

内容

家計に課題を抱えている世帯は多いものの家計改善に抵抗がある方も多く、自立相談支援や就労準備支援にて一体的に支援を行ないながら理解を求め、必要性を理解いただいた方は収支表を活用し家計を見える化し、必要に応じて貸付の斡旋等行いながら、自身で家計を管理できるように支援を行なっています。

実績

利用者数の推移：家計改善支援



フードドライブ

合同企業就職相談会

重層的支援体制整備事業

目的

重層的支援体制整備事業は、高齢・障がい・子ども・生活困窮等、分野別の支援体制では対応しきれないような“複雑化・複合化した支援ニーズ”に対応するため、分野や世代を問わない「相談支援」、「参加支援」及び「地域づくりに向けた支援」の３つの支援を一体的に実施し、包括的な支援体制を構築することを目的としています。

内容

社会福祉法の改正により、令和３年４月に「重層的支援体制整備事業」が創設され、竹田市では、令和３年度からの準備期間を経て、令和４年４月から本格実施し、地域共生社会の実現をめざしています。

包括的相談支援事業

目的

年齢や分野（高齢、障がい、子ども、生活困窮など）で区切らず、「まずはどんな相談でも受け止める」包括的な相談支援体制を整えています。

内容

竹田市では、高齢、障がい、子ども、生活困窮等、分野ごとの既存の各相談窓口が連携し、どの窓口でも安心して相談できる仕組みとして「なんでも相談窓口」を設置しています。本会では、高齢分野の地域包括支援センターと生活困窮分野の自立相談支援事業を市から受託し、相談支援を行っています。

〇地域包括支援センター運営事業P51
〇自立相談支援事業P33

多機関協働事業

目的

複雑化・複合化した課題を抱える人や世帯に対し、分野や組織の枠を超えて関係機関が連携し、支援を一体的に調整することを目的としています。

内容

関係機関の情報共有・連携・協働のための会議の調整等を行ないます。また、会議内で決めた役割分担や経過を随時確認し、関係機関への共有を行いながら、アウトリーチを通じた継続的支援事業や参加支援事業と協働し、ケースの状態に応じた支援が継続できるよう働きかけていく役割を担っています。

《開催している会議》

●**重層的支援会議**…多機関による支援を行うことへの本人同意を得て、各相談支援機関や関係機関等で支援方針や役割分担等を協議します。本人同意が必須という会議の性質上、開催頻度は少ないですが、本人の意志や決定を尊重した支援を行うためにも、重点的に開催を推進していく会議です。

●**支援会議**…多機関による支援に関して本人の同意が得られていないケースの支援方針や役割分担等を、社会福祉法に基づく厳重な守秘義務のもと、各相談支援機関や関係機関等で協議します。チームとなって支援をしていくための基盤として機能しており、今後も柔軟な開催を継続していきます。

●**包括的ケース会議**…支援の実働メンバーなどのコアメンバーで、支援方針・役割分担等を協議します。多機関協働による支援の初期介入の検討や、経過の共有、支援方針の軌道修正等のため、今後も実働の核となる会議です。

●**重層的連絡会議**… 2か月に1回、子育て・障がい・高齢者・生活困窮の相談員や、市の主管課を参集し開催。情報交換や勉強会等を行ないます。多機関令閨の基盤となっている会議です。

●**17地区別しんけんつながる会議**…17地区ごとに結成された、市・社協職員による地域づくりチームを参集し、地区毎に年2回ずつ開催しています。地域資源の充足状況の把握や開発に向けた検討、地域づくりにおいて自分たちができる事などを協議しています。

実績

会議の開催回数

会議名 / 年度	重層的支援会議	支援会議	包括的ケース会議
令和４	3	0	6
令和５	0	0	10
令和６	0	6	6

17地区別しんけんつながる会議の様子

支援会議の様子

アウトリーチ等を通じた継続的支援事業

目的

支援が届いていない方へ支援を届けるために、関係機関との連携や地域住民とのつながりの中から潜在的な相談者を把握します。また、潜在的な課題を抱える人に関する情報を得たのち、あらゆる方法で時間をかけて丁寧な働きかけを行なっています。

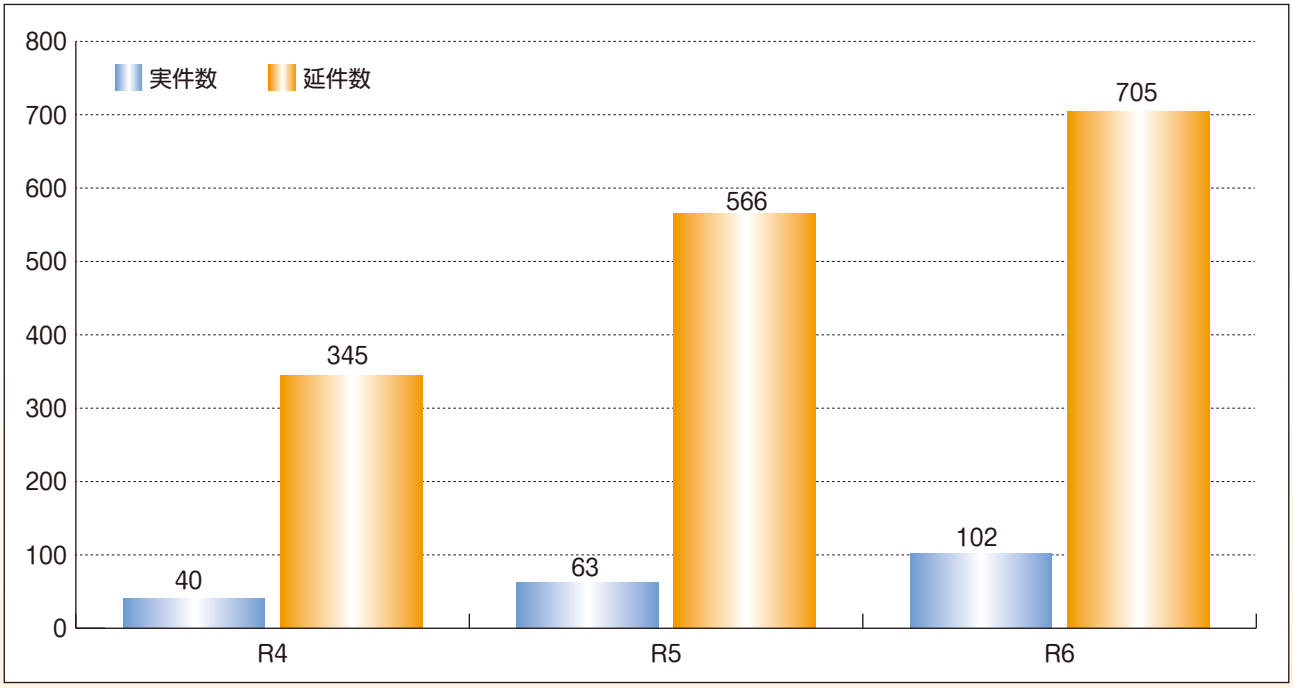
内容

対応しているケースの多くは、長期にひきこもり状態にある方などであり、本人とのつながりづくりや信頼関係の構築に時間を要する状況です。よって、関係機関や関係する会議等で得られた情報を基に、同行訪問などで自宅訪問が可能な方には初回訪問ののち継続的につながり、たとえ本人の受け入れに拒否があったとしても、相談を寄せてくれた家族や知人、地域の方等の心配を傾聴しながら、本人とつながるきっかけができるように努めています。

重層的な課題があるケースは「多機関協働事業」との連動により、支援体制を拡充できるよう取り組んでいます。

実績

アウトリーチの推移



※アウトリーチ…支援が必要であるにもかかわらず届いていない人に対し、行政や支援機関などが積極的に働きかけて情報・支援を届けること

参加支援事業

目的

社会参加に困難を抱える人が、地域の中で居場所や役割を見いだし、安心して社会参加できるよう支援することを目的としています。本人の思いや状況に寄り添いながら、地域の資源などを活用して、社会とのつながりづくりに向けた支援を行っています。

内容

課題を抱える当事者に合わせて、既存の地域資源等につないだり、資源がない場合は作りだす支援を行なっています。

就労体験や活動体験をサポートすることで、地元企業への就職や暮らしのサポートセンターの活動会員へとつながっています。

実績

参加支援対応件数

年　度	令和４	令和５	令和６
件　数	9	31	47

つなぎ先

くらサポ、傾聴ボランティア、ハルタス、すごーく元気になる教室 等

暮らしのサポートセンターへの参加

企業への就職をサポート

地域づくり事業

目的

世代や属性を超えた誰もが参加できる居場所や活動の場を整備し、地域住民の交流や参加の機会を増やすことで、孤立を防ぎ、困りごとを抱えた人も地域で安心して暮らすことができるよう、地域住民や関係機関、団体等の連携を強化し、地域全体で支え合う基盤づくりを進めています。

内容

住民、関係団体、支援機関等と連携し、誰もが参加しやすい居場所づくりや交流の場の創出を進めています。制度による支援だけに頼るのではなく、地域住民や団体、関係機関などのつながりや支え合いといった地域の力を活かした仕組みづくりに取り組んでいます。本会では、子どもの分野では地域子育て支援拠点事業、介護の分野では生活支援体制整備事業、生活困窮の分野では生活困窮者支援等のための地域づくり事業、を市から受託し、地域全体で支え合いながら安心して暮らせる環境づくりを進めています。

〇地域子育て支援拠点事業P61
〇生活支援体制整備事業P26 ～ 28

生活困窮支援等のための地域づくり事業

目的

地域におけるつながりの中で、住民が持つ多様なニーズや生活課題に柔軟に対応できるよう、地域住民のニーズ・生活課題の把握、住民主体の活動支援・情報発信、地域コミュニティを形成する居場所づくり、多様な担い手が連携する仕組みづくりを行うことを通じて、身近な地域における共助の取り組みを活性化させ、地域福祉の推進を図ります。

内容

住民主体の活動支援や情報発信を行っています。本会では、暮らしのサポートセンター等住民主体の活動をより多くの地域住民に周知を図るため、広報誌やケーブルテレビを通じて情報発信を行っています

竹田市権利擁護・成年後見支援センター

目的

認知症、知的障がい、精神障がい等により、判断能力が十分でない方等を支えるための権利擁護支援を行うと同時に、その手段の一つである成年後見制度についての利用促進を図っています。

内容

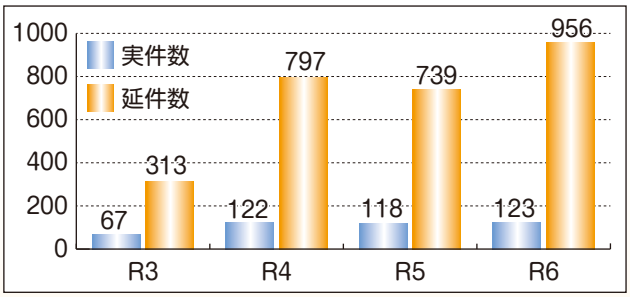
令和２年12月策定された竹田市成年後見制度利用促進基本計画の中、権利擁護支援の中核機関として竹田市権利擁護・成年後見支援センターの設置が盛り込まれ、令和３年４月から本会がセンターを受託し、取り組みを進めてきました。

センターでは、①権利擁護全般の相談窓口を中心に、②権利擁護の地域連携ネットワークの構築、③成年後見人の受任調整、④市民後見人の養成、⑤権利擁護や成年後見制度の普及啓発等に取り組んでいます。

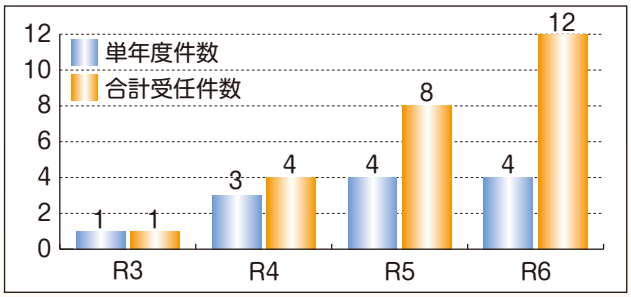
また、センター運営と同時に、本会が法人として被後見人を受任する、法人後見事業を開始しました。第三者後見人の需要が高まる中、年々受任者数は増加しており、限りある専門職等の受け皿を補う意味でも、地域の重要な社会資源の一つとなるよう支援を行なっています。

実績

センター相談件数の推移



法人後見受任件数の推移



市民後見人養成講座修了式

成年後見セミナー（講演会）

市民後見人養成講座の様子

普及啓発～市民向け成年後見研修

日常生活自立支援事業「あんしんサポートセンター竹田」

目的

認知症高齢者、知的障がい者、精神障がい者などで判断能力が十分でない方が、住み慣れた地域において自立した生活が送れるよう、利用者との契約に基づき福祉サービスの利用援助等を中心に日常的な金銭管理や重要書類等の預かり・保管などの支援を行なっています。

内容

平成11年10月から制度が施行され、地域福祉権利擁護事業が始まりました。

当初、豊肥地域において旧竹田市社協が基幹的社会福祉協議会となり、近隣市町村社協が協力社協として事業がスタートし、その後、県下市町村社協が実施社協となり、また、平成19年度からは日常生活自立支援事業と名称変更され、主に竹田市内の利用者の方々と契約を締結し、直接支援を開始しています。

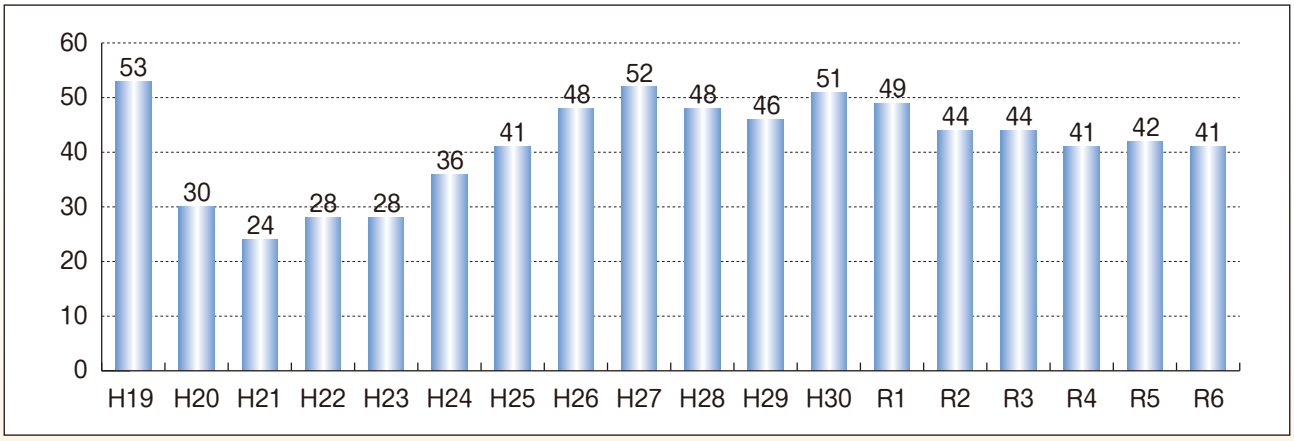
担当の専門員だけでは40名以上の利用者へ月１回程度の支援を行なうことは難しく、支援員（訪問担当の短時間職員）がいて成り立っている事業であり、専門員と支援員が連携しながら利用者への支援を行なっています。

また、利用者も認知症の進行等により成年後見制度の必要性が高まる中、権利擁護・成年後見支援センターの設置に伴い、令和３年度以降、12名の方が成年後見制度へ移行しています。

実績

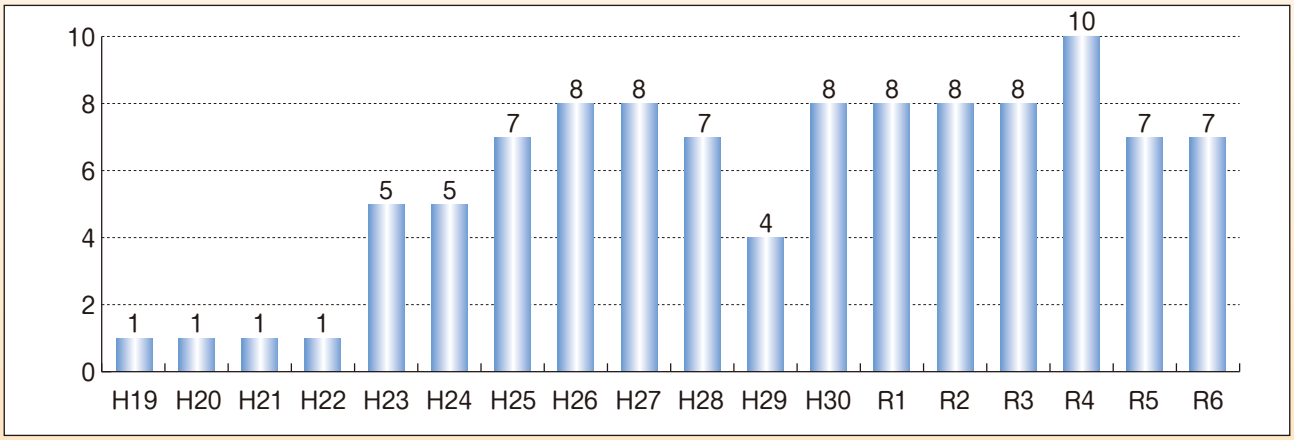
利用者数の推移

実利用者数（年度末）



支援員の推移

支援員数（年度末）



介護予防事業対象者把握事業

目的

高齢者が住み慣れた地域で暮らせるように、在宅75歳以上の高齢者等を直接訪問し実態を把握する中、何らかの支援を要する状況を把握した場合、関係機関等へ繋いでいます。
担当地域の住民、家族等から高齢者や世帯等の課題について相談を受け付け、必要に応じて関係機関等へ繋いでいます。

内容

平成19年に合併による市の周辺部対策としての総合相談支援センター事業に始まり、平成26年には高齢者相談支援センターへと名称や業務内容の一部変更を経て、平成29年４月から現在の事業となり、本会が市から受託し訪問活動を開始しています。

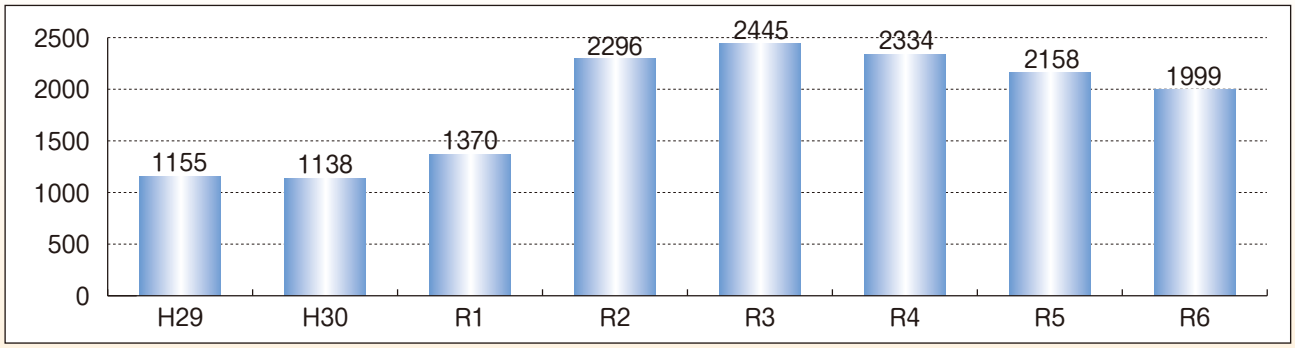
当初は市内を４ブロックに分け、うち３ブロックは本会で１ブロックは他の社会福祉法人が受託し、令和７年度からは市内を５ブロックに分け、うち４ブロックを本会が受託しています。実態把握業務としては、市から依頼された75歳以上で各種サービスを利用していない方の訪問リストを基に訪問し、様式（聞き取り項目、活き生き度チェック）による聞き取りを行って、チェックが入るなどの気になる方は、介護予防教室や住民主体の介護予防活動などに繋がるよう、市担当課や地域包括支援センター等へ報告しています。

相談業務としては、訪問時などに相談があった場合、必要に応じて市担当課や地域包括支援センターなどの関係機関へ繋いでいます。

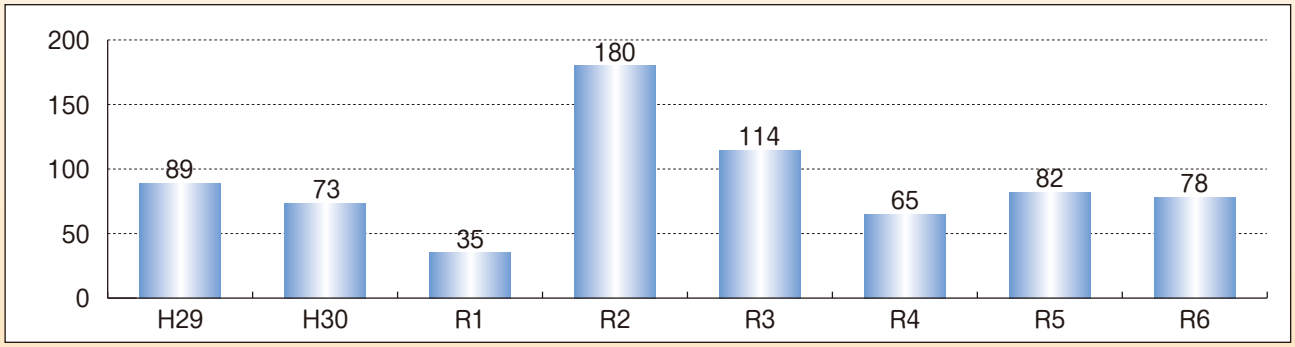
また、関係機関等から定期的な見守りや状況把握が必要な方の定期訪問依頼があった場合は、訪問活動に併せて定期訪問し関係機関へ報告を行っています。

実績

訪問（実態把握、定期訪問）件数の推移



相談件数の推移



介護予防普及啓発事業（おしゃべりサロン）

目的

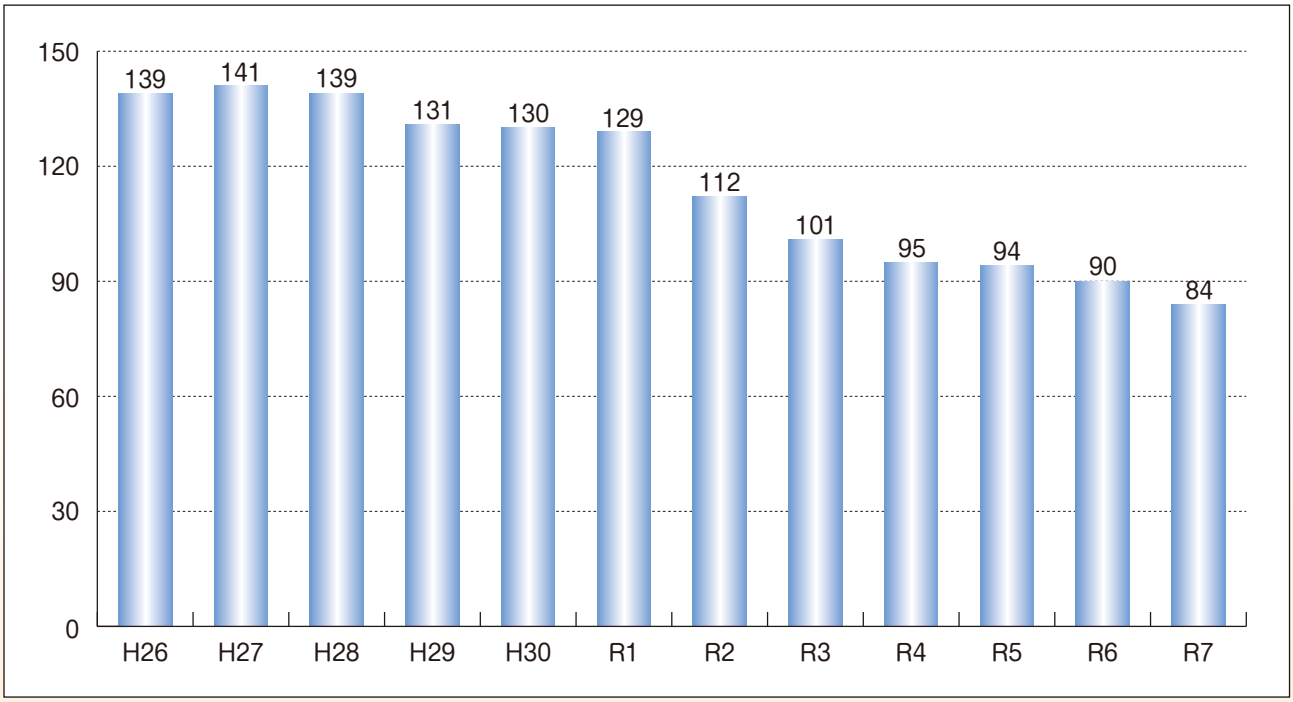
高齢者が身近な地域で、おしゃべりやレクリエーション等、生きがいづくり及び介護予防に努めることを目的としています。

内容

竹田市では、高齢者が身近な地域で気軽に集い、交流を深めながら介護予防に取り組める場として、「おしゃべりサロン」を平成19年から市内全域で立ち上げ、活動の充実を図ってきました。平成26年に本会が介護予防普及啓発事業（おしゃべりサロン事業）を受託し、地域のつながりを大切にしながら、誰もが安心して参加できる居場所づくりと介護予防活動の充実に努めるとともに、地域課題やニーズの把握を行い、関係機関につないでいます。また本会では、サロン運営の後押しをするため補助金や講師派遣などの支援を行っています。サロン活動の継続や新たなサロンの立ち上げを目的とした普及啓発活動にも取り組んでいます。

実績

サロン数推移



地域支え合い事業（暮らしのサポートセンター）

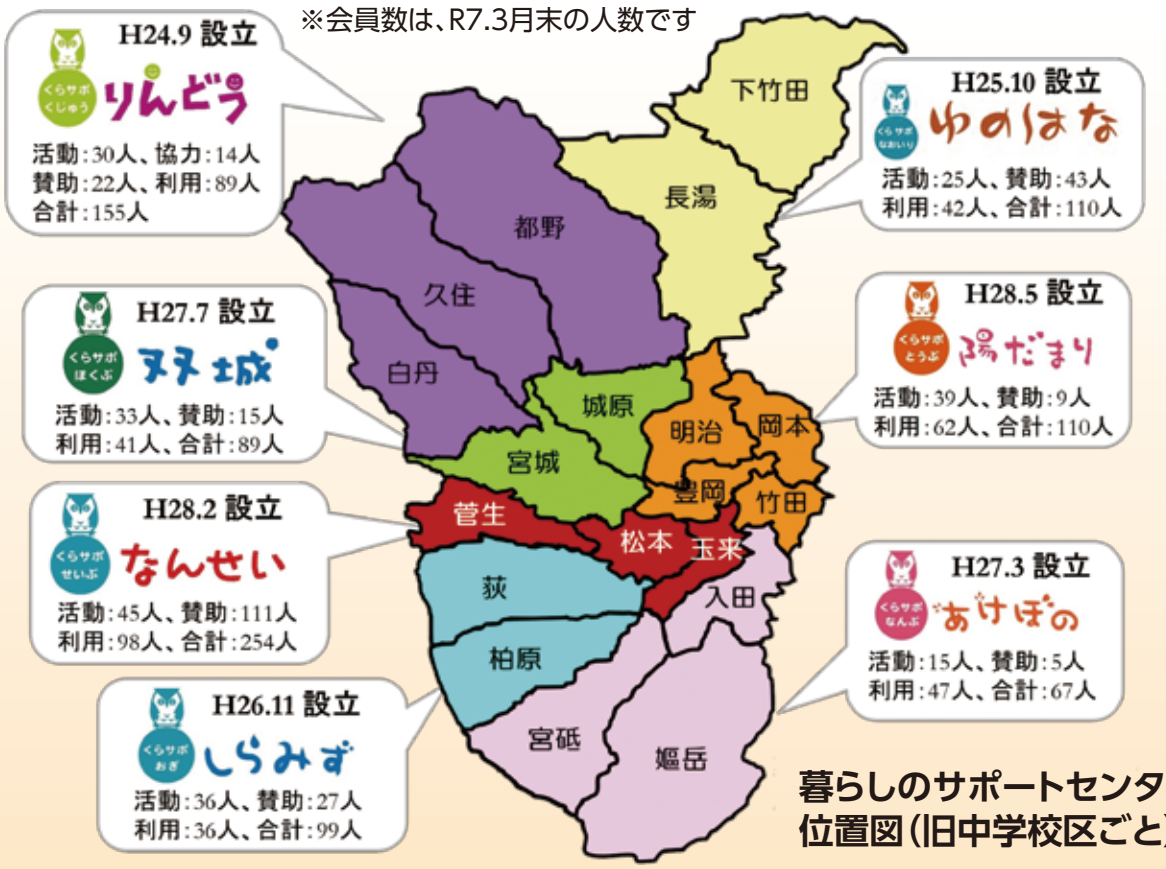
目的

暮らしのサポートセンター（以下：くらサポ）は、住民同士の支え合いを基本として、介護保険等の公的サービスでは補えない、暮らしのちょっとした困りごとに対し、「生活支援サービス」を実施しています。また、地域住民が気軽に参加できる交流の場「広場」を運営し、介護予防や健康づくり、生きがいづくりを目的として活動しています。地域の中で人と人がつながり、互いに支え合う関係づくり、仕組みづくりに取り組んでいます。

内容

くらサポは、超高齢社会へと加速する竹田市の現状と課題を踏まえて、平成22年に厚生労働省の地域雇用創造推進事業を活用して、地域を支える互助の仕組みづくり、高齢者の就労と社会参加を目指した竹田市ならではの「コミュニティビジネス」の創出として竹田市経済活性化促進協議会が取り組み、平成24年９月にくらサポ・久住「りんどう」を設立し、平成28年５月に市内全域７エリアでくらサポが設立しました。平成30年４月に本会が事業を引き継ぎ、７ヵ所のくらサポに「支援員」を配置し、くらサポの自立に向けて継続した運営支援を行っています。

各くらサポ間の意思統一と連携を図るため、平成28年11月にくらサポ連絡協議会を設立し、共通の課題や成果を共有し、相互に充実、発展することを目的として２ヶ月に１回くらサポ連絡会議を開催しています。また、会員相互の交流を深めるため、くらサポ大広場を年１回開催しています。



暮らしのサポートセンター
位置図（旧中学校区ごと）

生活支援の様子

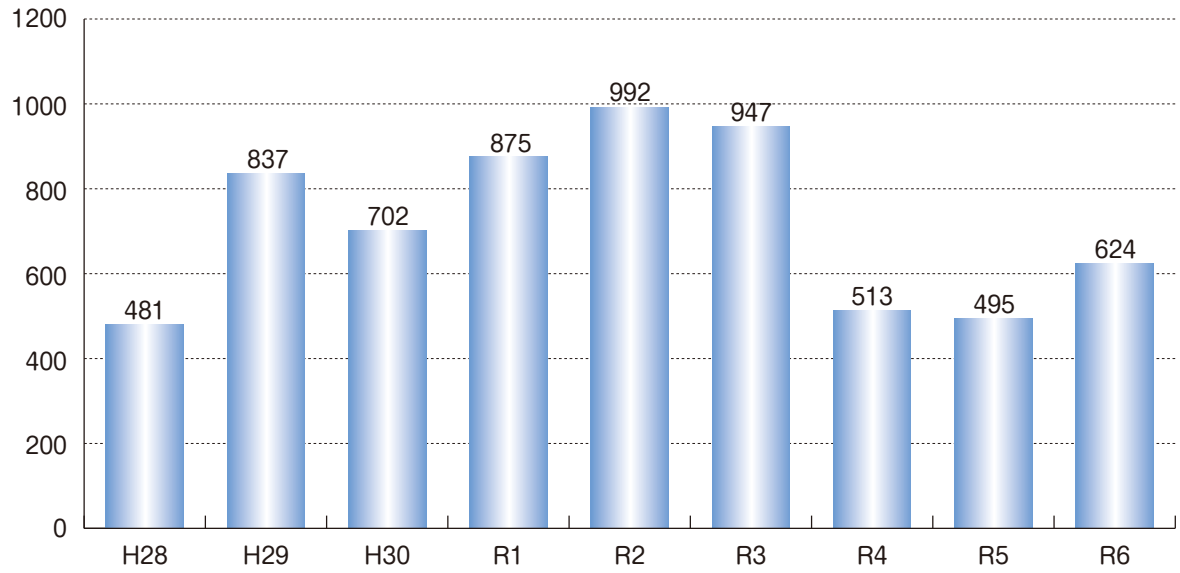
広場の様子

連絡会議の様子

大広場の様子

暮らしのサポートセンター７か所 生活支援 年度別件数について（H28～R6）

※重複・一件にまとめている支援あり



支援の内容

1位：草刈り・草むしり　　2位：家事支援（掃除、窓ふきなど）　3位：見守り支援

介護職員初任者研修事業

目的

竹田市内の事業所で働く介護職員の人材育成や、介護の知識・技術を取得して地域の介護力の向上をめざすことを目的に行っています。

内容

平成12年から介護保険制度が始まり、訪問介護職員を養成する研修が無かったため、市から社協が受託し研修を行うようになりました。

受講対象者は、概ね70歳までの竹田市在住の方で、市内の介護事業所等に就職を希望する方や働く意欲があることを対象に募集し、訪問介護職員養成研修(2級課程)及び介護職員初任者研修を行いました。令和２年度から令和５年度は、受講者が少なく一時中止をしていましたが令和６年度に再開をしました。令和７年度は、市担当課と協議し時間数の少なく、受講しやすい研修として、生活援助従事者研修受講者募集を行いましたが、申込者が少なく研修は中止となりました。

実績

介護職員初任者研修 年度別受講者数

講　座　名	年　度	受講者人数
訪問介護職員養成研修（2級課程）	平成23	18
	平成24	35
介護職員初任者研修	平成25	30
	平成26	13
	平成27	18
	平成28	11
	平成29	14
	平成30	5
	令和元	7
	令和６	15
生活援助従事者研修	令和７	申込者が少なく中止

講義の様子

修了証書授与式

居宅介護支援事業（竹田市介護保険ケアプランセンター）

目的

竹田市介護保険ケアプランセンターは、要介護及び要支援にある方が、可能な限り住み慣れた地域で日常生活を送ることができるよう、それぞれのご意向と困りごとに対し、住宅環境や心身の状況等に応じ、適切なサービスが受けられるよう、利用者とサービス事業所との調整や支援に努めています。

内容

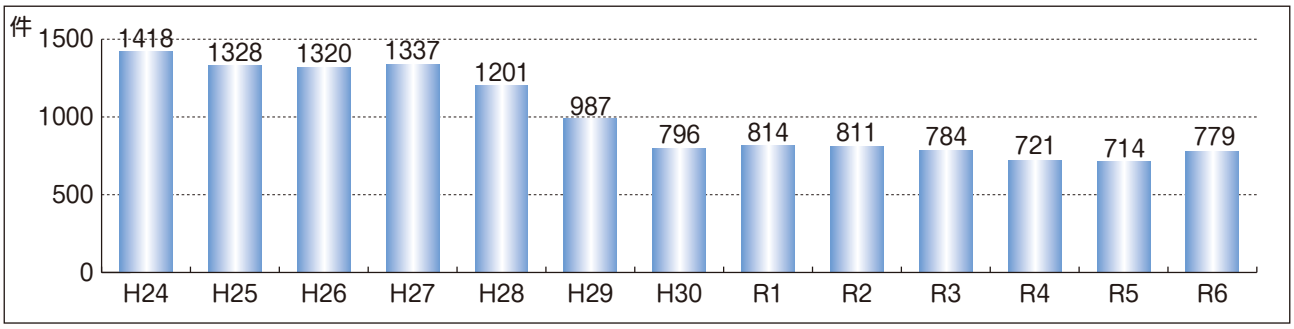
合併以前から居宅介護支援事業を行っていましたが、平成19年５月１日に竹田・荻・直入のケアプランセンターを統合し、全市でサービス展開を実施しています。令和６年の法改正で令和６年７月１日には指定介護予防支援事業者の指定を受け、直接予防プランの作成が行えることとになりました。

近年、一人暮らしや近くに家族のいない方も多く、ケアマネの支援が必要になっている方が多くなっています。

実績

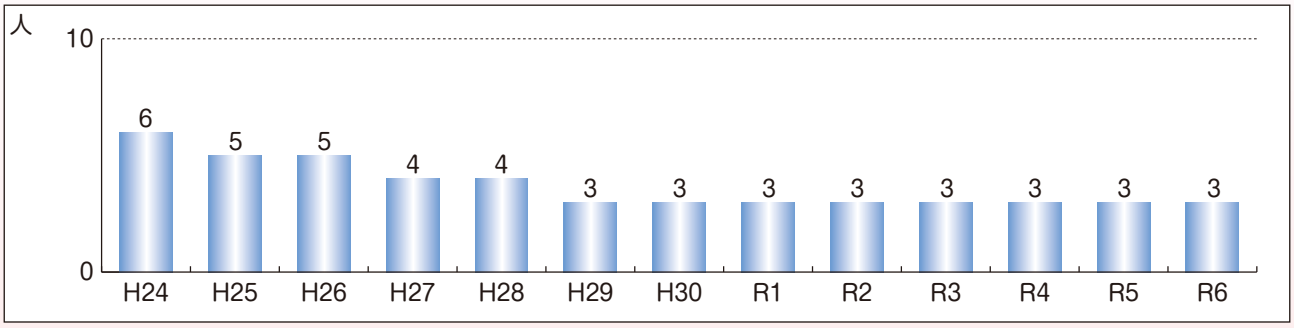
サービス提供回数の推移

（年度）



ケアマネ数の推移

（年度）



利用者宅を訪問

在宅生活継続のためサービスについて説明

訪問介護事業（ヘルパーステーション竹田）

目的

自分や家族だけでは日常生活を営むことが難しくなった高齢者が、住み慣れた自宅で過ごしたいと思うご本人の意向の寄り添い、自分らしい生活をおくるために「できること」の継続や「できそうなこと」が引き出せるようにヘルパーが自宅に訪問して、生活援助や身体介護などを行っています。

内容

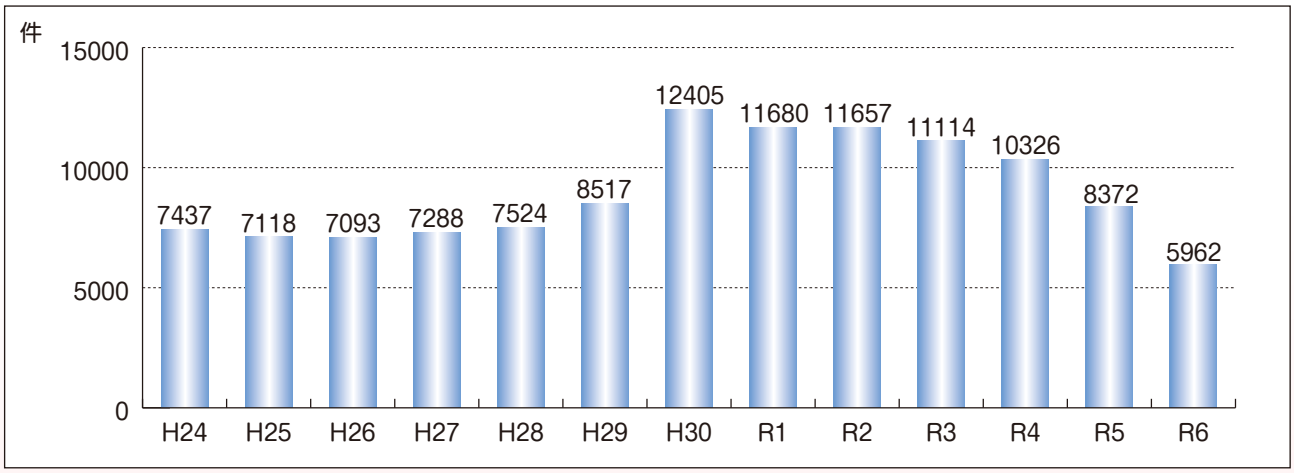
合併以前から、訪問介護事業を行っていましたが、平成19年５月１日に竹田・荻・直入の訪問介護事業所を統合し全市でサービス展開を実施しました。令和元年７月１日に介護予防訪問介護事業（訪問型サービス）を開始し、要支援や要介護の方の自宅を訪問し介護サービスを行っています。

ヘルパーの人材不足を解消するため、定年を70歳から75歳に引き上げ、随時募集を行っておりますが、応募もなく定年を迎えて退職される方が多いため、ヘルパーの人数は減少しています。現在は少ない人数で利用者が自宅でできるだけ生活できるように支援しています。

実績

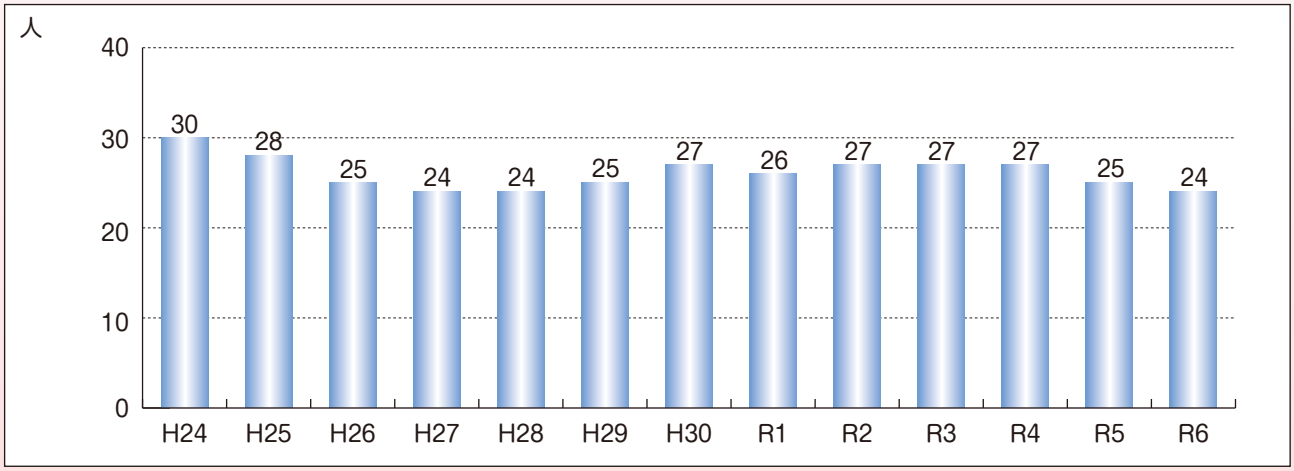
サービス提供回数の推移

（年度）



ヘルパー数の推移

（年度）



障がい福祉サービス事業（竹田障害福祉サービスセンター）

目的

障がい者が居宅において自立した日常生活又は社会生活を営むことができるように、入浴、調理、洗濯及び掃除等生活に関する支援をホームヘルパーが訪問して支援を行っています。また、障がいにより、移動に困難がある方に対し、外出時に同行し、移動に必要な情報提供など必要な援助を行っています。

内容

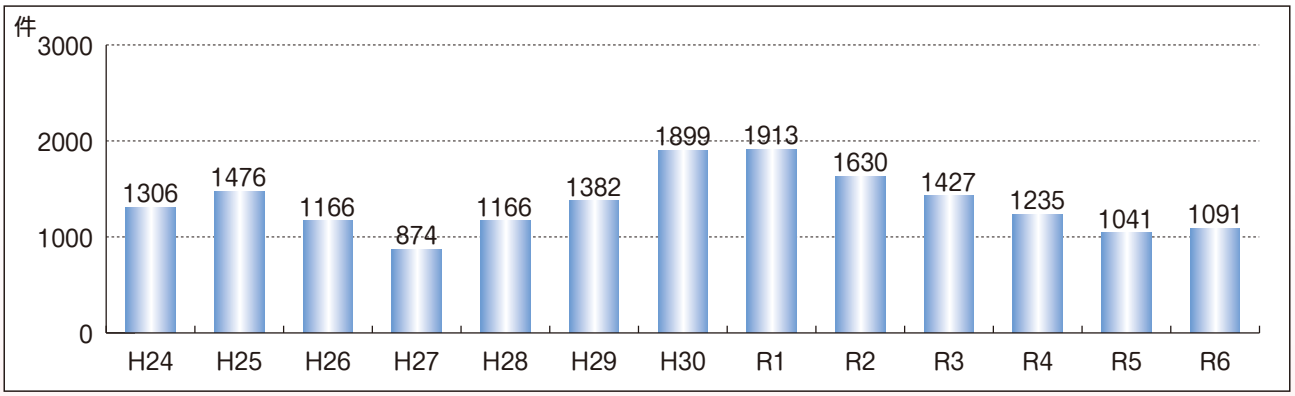
合併以前から、訪問介護事業とあわせて障害福祉サービス事業にも取り組んでいます。障がい者の自宅を訪問し、入浴、排せつ、食事の支援や掃除、洗濯など日常生活のサポートを行っています。また、平成23年の法改正以降は、同行援護従事者養成研修を修了したヘルパーが、同行援護を行っています。

市内に障がい者を対象とした居宅介護事業所が少ないため、訪問介護事業と調整をおこないながら受入れをしています。

※同行援護：視覚障害により移動が困難な方に対して、専門の従事者が外出に同行し、移動に必要な情報の提供や、安全な移動のサポート、排泄・食事などの介護を行う障害福祉サービスです。

実績

サービス提供回数の推移



共に行う調理支援

御前湯へ同行援護

地域密着型通所介護事業（荻町デイサービスセンター）

目的

要介護状態にある高齢者に、通所により食事介助・入浴介助・排泄介助等自律的生活の助長及び心身機能の維持向上や閉じこもり予防等の支援を行い、家族や介護者の介護負担の軽減が図れるようサービスを提供しています。

内容

合併以前から荻町介護保険サービスセンターとして通所介護事業を行なってきました。その後、経営面や人材確保の観点から事業検証を継続してきた結果、地域からの存続の声や経営面を考慮しつつ、荻地域唯一のデイサービスを存続させるため、令和元年４月より通所介護事業から地域密着型通所介護事業へ移行しました。

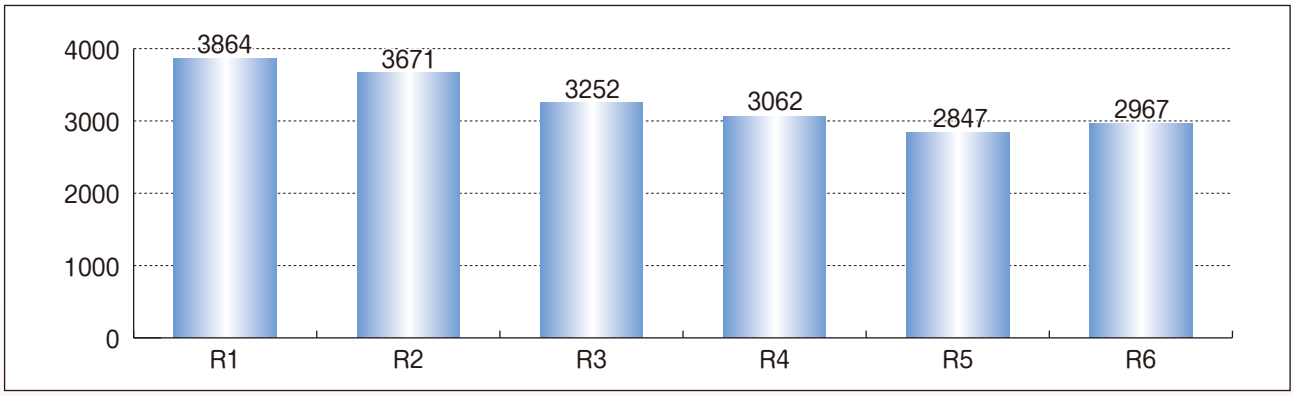
移行後は要介護者のみを受け入れており、要支援の時期から他施設を利用している方は、当該施設を継続して利用される方が多く、新規利用に繋がりにくい状況です。

しかしながら、１日定員18名の小規模事業所として、日常生活訓練やレクリエーションなどを通じて、一人ひとりに応じた介護サービスを行い、利用者に寄り添った支援を行っています。

実績

サービス提供回数の推移

（年度）



日常生活訓練
皆さんにできることをお手伝いいただく形で、日常生活の動作をスムーズに行うための訓練を行っています。

レクリエーション
繊細な動作が含まれる内容を実施し、手足の機能の維持向上につなげています

地域包括支援センター

竹田市 長寿支援センター つるかめ

目的

地域の高齢者等の心身の健康保持及び生活の安定のために必要な援助を行うことを業務とし、地域の保健医療の向上及び福祉の増進を包括的に支援する中核施設として設置しています。（介護保険法第115条の46）

公正で中立性の高い事業運営を行い、地域の特性や実情を踏まえた地域包括ケアシステムの構築を目指し、竹田市地域包括支援センター基本指針・運営指針に基づいて柔軟な事業運営を行っています。

内容

平成18年の介護保険制度の改正により、高齢者が介護・医療・生活支援などを含め、地域で総合的かつ継続的に支援される体制を整えるため市町村に設置が義務づけられ本市では竹田市社会福祉協議会が受託しました。

包括的支援事業として、高齢者やその家族、または関係者や関係機関から寄せられる相談について、地域包括支援センターの３職種（保健師、主任介護支援専門員、社会福祉士）と情報を共有し、解決に向けチームでの対応をおこなっています。さらに保健・医療・福祉・介護の多職種や各種団体との連携を図り、竹田市地域包括ケアシステムの構築に向けて事業を推進しています。

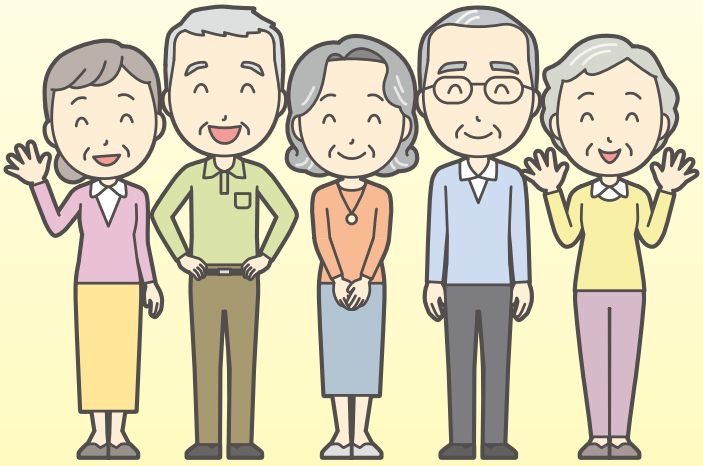
地域包括支援センターの役割や業務について、通称名「長寿支援センターつるかめ」のリーフレットやステッカーの配布や、広報誌「つながるたけた」を発行して関係機関や高齢者等に周知を行っています。

平成27年度の法改正により、これまでの包括的支援事業に社会保障充実分の４事業（認知症総合支援事業、在宅医療・介護連携推進事業、生活支援体制整備事業、地域ケア会議）が追加されたことから、地域包括支援センターでは、認知症総合支援事業及び地域ケア会議の２事業について受託し、他の２事業については、事業の協力支援を行っています。

平成28年には、介護予防・日常生活支援総合事業の実施に伴なって、地域包括支援センターの機能強化が求められ、特に介護予防地域リハビリテーション支援の視点から、理学療法士、作業療法士等を配置し、地域リハビリテーション活動支援事業を受託して、高齢者の自立支援を行っています。

令和３年度から通所型サービス事業を受託し、生活機能の改善や重度化防止に向けて実施しています。

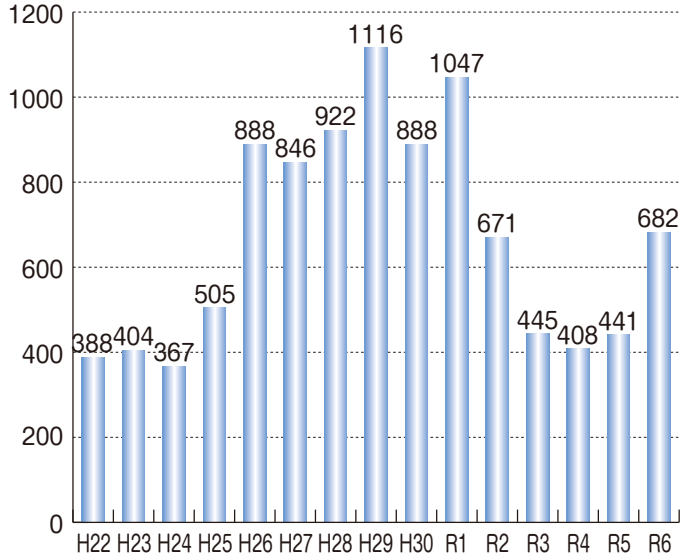
令和４年度には、重層的支援体制整備事業の多機関協働事業を受託し、複合化、複雑化した支援ニーズの調整役を担い連携を図っています。



総合相談・権利擁護事業

高齢者の生活と権利を守る為、「介護」「健康」「暮らし」「お金」など、どのような相談でも受け止めて解決まで一緒に伴走したり、必要に応じて関係機関につなぎます。

年度別相談件数の推移（実件数）



出前講座

消費者被害に遭わないように地域のサロンに出向き、訪問販売や点検商法などの事例を通し注意点等を説明

包括的・継続的ケアマネジメント事業

地域の介護支援専門員の支援や様々な機関とのネットワークづくりを行い、暮らしやすい地域づくりを行います。

主任介護支援専門員勉強会

毎月開催し、質の向上に努めています。今回は救急救命講習を受け、救急対応に役立てます。

竹田市介護支援専門員協議会研修会

「適切なケアマネジメント手法」について学んでいます。担当者会議等で活用していきます。

認知症総合支援事業

「認知症について正しい理解を持ち、予防活動を行い、認知症になっても尊厳が守られ、適切な支援が受けられるまち、認知症になっても安心して暮らせるまち」を目指しさまざまな事業を推進しています。

認知症サポーター養成講座

認知症について地域や職域団体、小中高等学校等で講座や学習会として開催しています。現在、34か所の企業団体が受講しています。

いきいき運転健康教室

講話や脳の健康度測定、健康チェック等を行い、高齢者の運転継続支援及び認知症の予防や早期発見に努めています。

脳の健康度測定会

デジタルツール「のうKNOW」を使った脳の健康度チェックを行い予防活動への関心を高めるだけでなく現役世代を含めた若年層への認知症啓発を行っています。

広場ふらっとステーション

認知症の人や認知症や介護に関心がある方など、誰もがふらっときて気軽にフラットな気持ちで過ごせる広場としてチームオレンジたけたが開催しています。

地　域　ケ　ア　会　議

介護支援専門員や介護サービス事業所が、各専門職からアドバイスを受け、本人の自立支援や地域課題の抽出をしています。

医師が参加する地域ケア会議

年に2回医師が参加する地域ケア会議を開催しています。アドバイザーに医師や理学療法士、管理栄養士、歯科衛生士、訪問看護師、包括（保健師、社会福祉士、主任介護支援専門員）等が出席し、個別課題に対してのアドバイスや地域課題の抽出を行いました。

通所型・訪問型サービス事業

通所型

令和３年７月より短期集中予防サービス通所型サービス事業を開始しました。自立支援として3か月間、生活機能を改善するため運動器の機能向上、栄養改善、口腔機能改善、コミュニケーション向上のプログラムを実施しています。フレイル(加齢により心身が老い衰えた状態)を予防し、やりたいことができる心と身体づくりを行います。

訪問型

平成28年より短期集中予防サービス訪問型サービス事業を開始しました。自宅を訪問し、生活機能動作改善のための体操指導や動作指導等を行い、自立に向けた支援をしています。

住宅改修・福祉用具適正化事業

理学療法士、作業療法士等が自宅を訪問し環境や動作の確認を行い、対象者の身体状況を踏まえて用具や住宅改修の提案を行っています。必要な箇所にしっかりとした住宅改修や福祉用具を設置する事で、今後も安全に自宅での生活が継続できるよう支援しています。

第１号介護予防ケアマネジメント事業

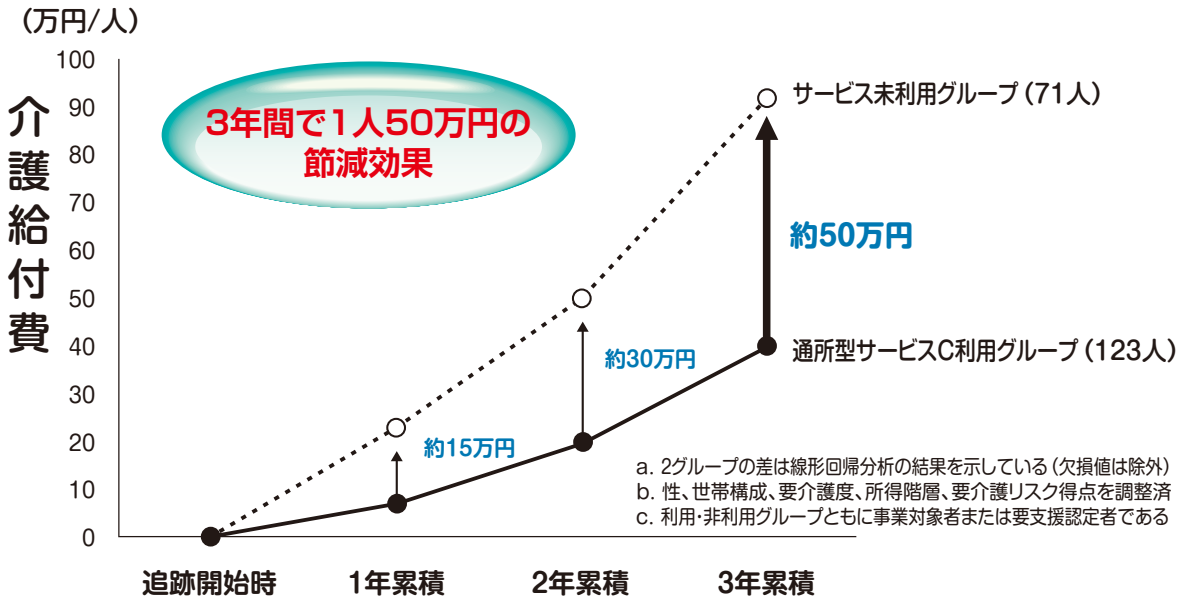
高齢者が可能な限り要介護状態になるのを防ぎ、また要支援・要介護状態になったとしてもその悪化を抑制し、住み慣れた地域で自立した日常生活を送れるよう支援するサービスです。

地域の様々な場所で基本チェックリストを行い、フレイル状態に移行していないか確認を行い、運動教室や趣味の教室、就労、ボランティアなど、それぞれに合った社会参加支援を行っています。

令和２年度よりＩＣＴを活用した自立支援型ケアマネジメントに取り組み、ケアマネジメント力の向上、平準化、業務の効率化を推進しています。

このＩＣＴ活用データの分析から、竹田市の通所型サービス事業（通所型サービスC）への参加者は３年間で一人当たり約50万円の介護給付費節減になるという結果が出ました。

（令和５年度末；日本福祉大学・オムロン株式会社による）



地域リハビリテーション支援事業

地域における介護予防を機能強化するために、通所、訪問、地域ケア会議、サービス担当者会議、住民運営の通いの場等へリハビリテーション専門職が支援を行っています。

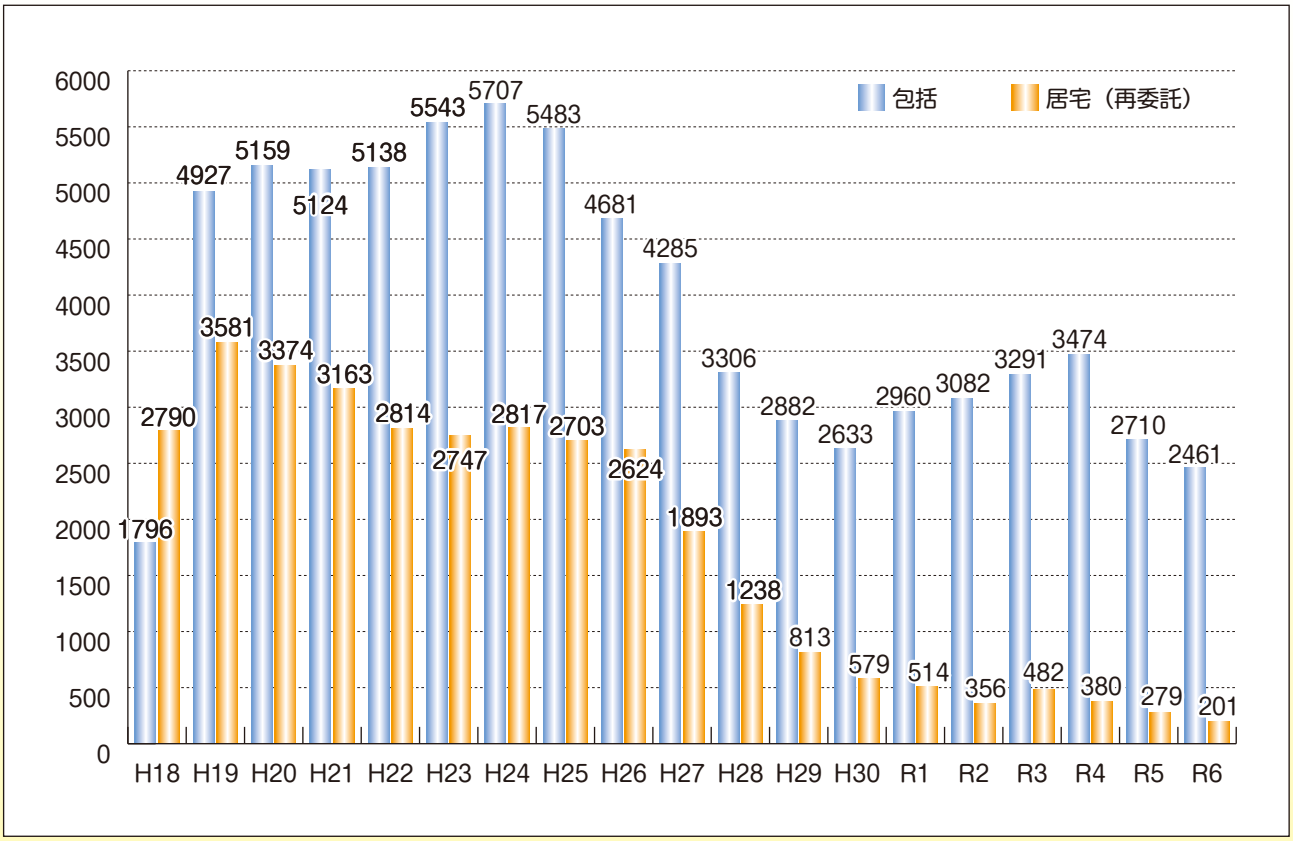
専門職が様々な通いの場に出向き、運動や栄養・口腔指導を行っています。

介護予防支援事業

要支援１、要支援２の認定を受けた方に対して、自立して生活ができるように、一人ひとりの介護予防サービス計画書を作成したり、サービス等の調整を行います。一部は居宅介護支援事業所へ再委託を行っています。

介護予防給付

（年度別）



幼保連携型認定こども園　荻げんきこども園

目的

義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとしての満３歳以上の子どもに対する教育並びに保育を必要とする子どもに対する保育を一体的に行い、環境を通して子どもの健やかな成長を図るとともに、保護者に対する子育ての支援を行うことを目的としています。

内容

平成28年４月１日、新たな保育ニーズに応えるべく「幼保連携型認定こども園」への移行を前提として、竹田市から荻保育所の譲渡を受け私立荻保育園を開園しました。新園舎の建設にあたり、荻地域の各種団体で構成する「荻地域子育て支援拠点整備検討委員会」を組織し協議を重ね、保護者会や地域住民のご理解・ご協力のもと、基本構想についての合意形成が図られ、令和２年３月31日に保育園は閉園し、令和２年４月１日に幼保連携型認定こども園荻げんきこども園を開園し運営しています。また、園児数の減少に伴い定員数の見直しを行い健全な運営を行っています。

『教育・保育理念』

人や自然との豊かなかかわりの中で「生きる力」を育む

『園経営の基本方針』

1　子どもの安全と安心を基本とし、自ら伸びる力を大切にし、子どもの人権を尊重し、個性に応じた多様性のある教育・保育を行う。
2　多世代との交流を通じ、基本的な生活習慣や態度を学び、思いやりの心、感謝の心を育てる。
3　多様な体験活動を通して、豊かな感性を育て創造性の芽生えを培う教育・保育を目指す。
4　創意工夫により特色ある教育・保育をすすめ、子ども・保護者・地域に信頼されるよう努める。
5　地域に根ざした子育て支援を展開する。

『教育・保育目標』

やさしく　かしこく　たくましく

『子育て支援サービス』

- 延長保育事業
- 一時預かり保育事業

『重点的取り組み』

- 食農保育
- 幼児体育
- 多彩な体験活動
- インクルーシブ教育
- 多世代交流
- 園小の連携
- 集会活動の充実

※インクルーシブ教育（保育）…障害の有無、年齢、国籍、特性に関わらず、すべての子どもが同じ場で遊びや生活を共有する取組。

子育て支援事業

体操教室で学んだ演技を運動会で発表。

音楽教室で練習したマーチングを地域の行事で発表。

多世代交流で地域の老人クラブの方と芋ほり交流。

多世代交流で地域の老人クラブの方ともちつき交流。

体育的活動を発表する運動会。

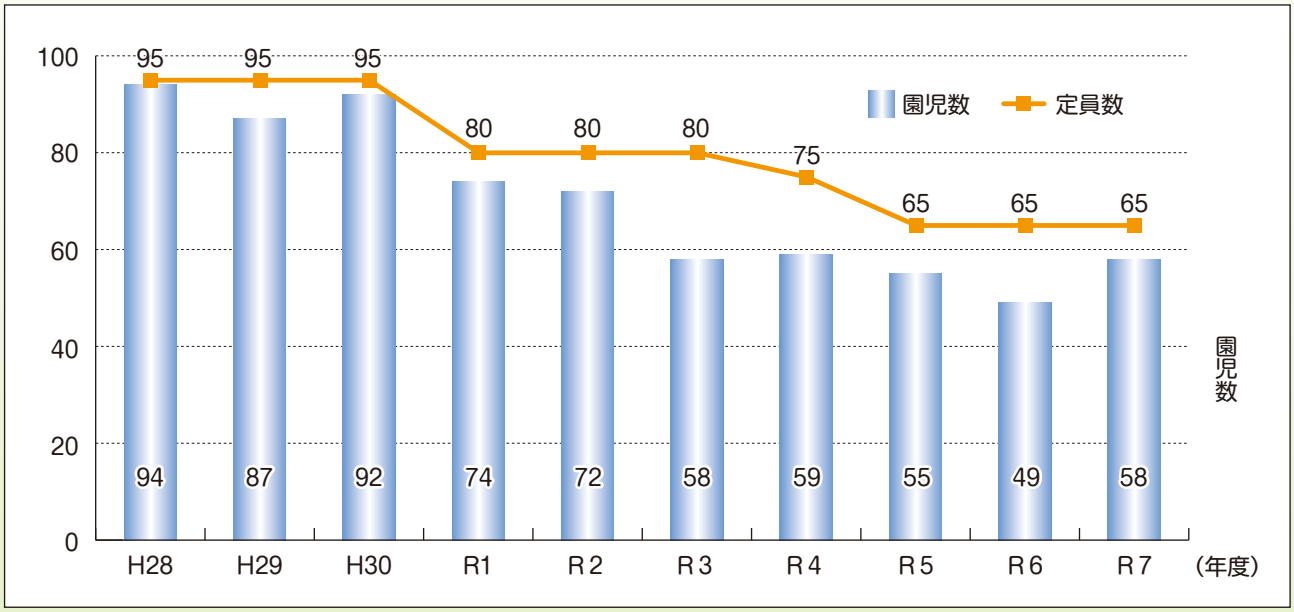
文化的活動を発表する発表会。

園小連携で小学校と合同で行うマラソン大会。

交通安全教室で交通ルールの体験学習。

実績

年度別定員数及び年度当初園児数の推移



公私連携型保育所　久 住 保 育 所

目的

入所する子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしい生活の場として保育を必要とする子どもの保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的としています。

内容

平成12年４月から久住保育所（業務委託）の運営を開始しました。また、市町合併により平成17年４月から「竹田市立久住保育所」に名称変更を行い、平成18年４月には、指定管理により運営を行ってきました。令和６年度末で指定管理が終了するにあたり令和７年４月より公私連携型保育所「久住保育所」として運営しています。

また、園児数の減少に伴い定員数の見直しを行い健全な運営を行っています。

※公私連携型保育所とは…

市と運営法人が協定に基づき、市から必要な設備の貸付け・譲渡その他の協力を受けて保育及び子育て支援事業を行う認可基準を満たした保育所です。公設（公立）から民設（私立）に移行しますが継続的に市が運営に関与できる仕組みになっています。

公私連携型保育所は大分県初の取り組みになっています。

『保育理念』

人や自然とのかかわりの中で「生きる力」を育む

『園経営の基本方針』

1　子どもの安全と安心を基本とし、自ら伸びる力を大切にし、成長と個性に応じた多様性のある教育・保育を行う。
2　多世代との交流を通じ、基本的な生活習慣や態度を学び思いやりの心、感謝の心を育てる。
3　様々な体験を通して、豊かな感性を育て創造性の芽生えを培う教育・保育を目指す。
4　創意工夫により特色ある教育・保育をすすめ子ども・保護者・地域に信頼されるよう努める。
5　地域に根ざした子育て支援を展開する。

『保育目標』

・つよい心と体をもった子ども（健康・安全・体力・意欲・粘り強さ）
・のびのびと遊べる子ども　　（好奇心・探求心・思考力・判断力・表現力）
・思いやりの心をもった子ども（自立心・協同性・道徳性）

『子育て支援サービス』

●延長保育事業　●一時預かり保育事業

『重点的取り組み』

●多彩な体験活動　●食育活動
●多世代交流　●保護者等に対する子育て支援

子育て支援事業

自然事象に親しむ
雨降り散歩

幼少期から表現する
ことを楽しむ活動
英語あそび

野菜の皮むきから始
めるクッキング

炊飯体験

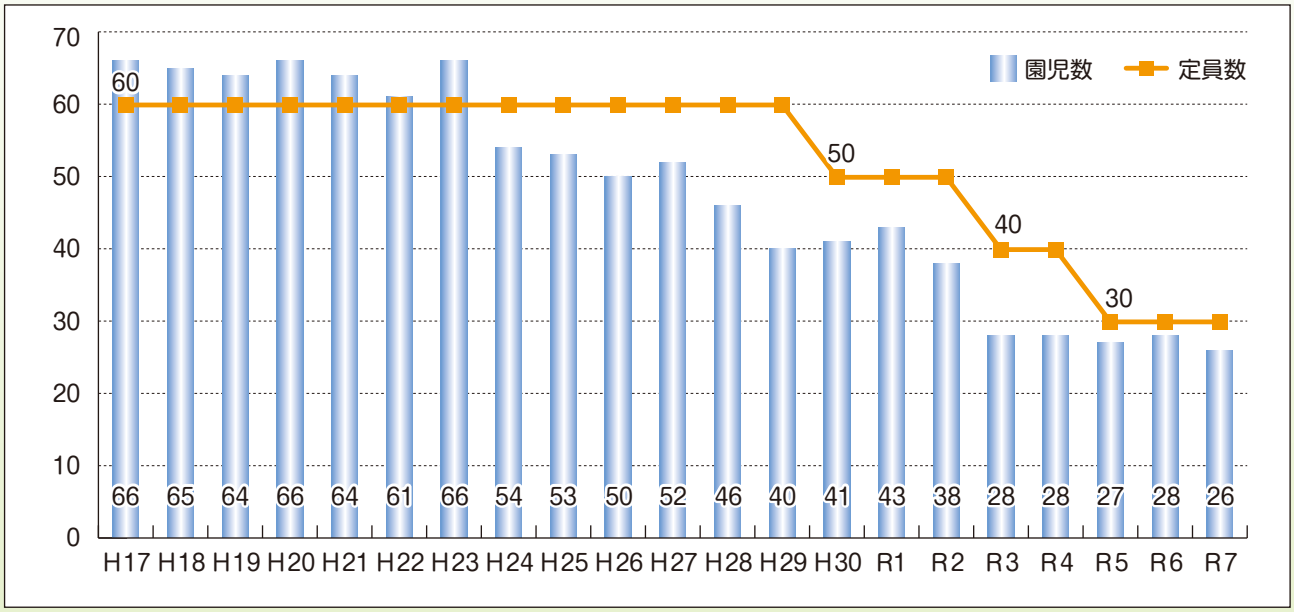
多世代交流で地域
の方と芋ほり交流

ダンスの披露と
肩たたきで
コミュニケーションを
とるふれあい昼食会

子育てについて語り合う場にもなっている保護者懇談会

実績

年度別定員数及び年度当初園児数の推移



地域子育て支援拠点事業　子育てひろば　うりっこ

目的

未就学児の子育て家庭に寄り添う場として、孤立家庭の予防を目指します。子育ての様子を対面で身近に感じ、利用する保護者同士が悩みや嬉しい出来事に共感し、こどもの育ちを分かち合う事で親自身の刺激にも繋がり親子関係の構築にも繋げ、子育てに関する不安や悩み、相談にも対応し気軽に足を運べる場を提供しています。拠点は荻地域にありますが、市内の方であればどなたでも利用ができます。

内容

令和２年４月から本会が市から受託し、主に乳幼児をもつ親子が気軽に集える場として、交流や育児相談などを行なっています。

- **「保育士さんと遊ぼう」**
  毎月のイベントで現役保育士さんを招いて絵本の読み聞かせ、親子体操、親子制作などを行っています。
- **「子育て相談日」**
  年に数回市から相談員さんを招き、予防接種や病院の事、入園など日常に関する様々な事を気軽に相談できる場を設けています。
- **「しゃぼん玉の会」**
  年に1度、しゃぼん玉の会の方による絵本の読み聞かせや、歌などを親子で一緒に楽しむ会を開催しています。
- その他にも、1歳の誕生日を迎えるこどもへ来所した時の写真で作ったフォトフレームのプレゼントや、季節に合わせた撮影会などもしています。
- 荻げんきこども園の給食を親子で1セット300円で食べることができ、月齢に合わせた食事を提供しています。

給食の様子

保育士・しゃぼん玉の会の様子

撮影会の様子

放課後児童健全育成事業　荻ぷちとまとクラブ

目的

保護者が仕事などで不在の小学生に対し、放課後に安全で適切な遊びや生活の場を提供し、こどもの「遊び」と「生活」の質的向上を通した健全な育成を図っています。

こどもが安心して居場所を持てる環境を提供すると同時に、保護者が仕事に専念できる環境を支援し、こどもの心身の健康と自立を促すことも目指しています。

春休みには、
お弁当を持って
お散歩へ出かけました。

内容

合併以前から本会が市から受託している荻町放課後児童クラブを、令和２年４月から拠点を移し、荻ぷちとまとクラブとして児童の受け入れを行なっています。

- 適切な遊び場の提供
- こどもの健康状態の管理と情緒の安定の配慮
- 安全、安心への対応（避難訓練など）
- 宿題や自習などの学習支援
- 季節に応じたイベントや体験活動の実施

避難訓練

毎月、さまざまな災害を想定した訓練を行っています。

夏祭り

クラブの一大イベント!!
こども達も毎年楽しみにしています。

地域の方との交流や、食べ物コーナーなど
たくさんの企画を用意しています。

季節の制作

こども達に季節感や自然の変化を感じてほしいと思い、毎月製作を行っています。
でき上がった作品はクラブに飾っています !!

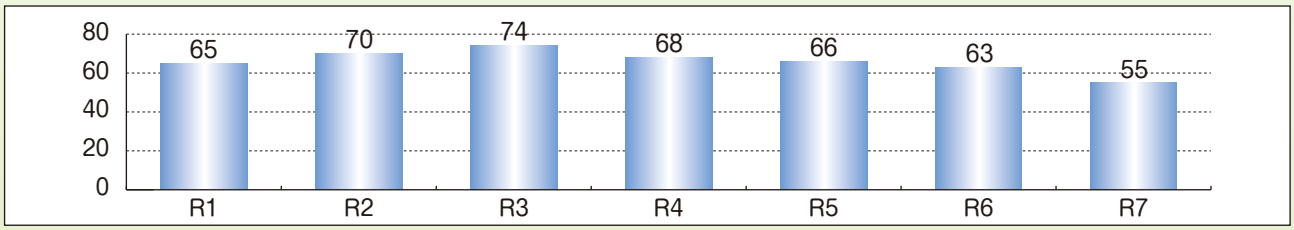
クリーン作戦

自分たちで使う物や、おもちゃは自分たちでキレイにしましょうと毎月行っています。

実績

登録児童数の推移

（年度当初）



法人運営事業

◎役員（理事・監事）評議員の概要

平成17年４月の竹田市・荻町・久住町・直入町の合併に伴い、新たな竹田市社会福祉協議会として発足して以来、社会情勢の変化や福祉制度の改正に柔軟に対応しながら、地域福祉の推進に取り組んできました。平成28年の社会福祉法改正は、社会福祉法人に対し、公益性と透明性の向上、ガバナンスの強化を求めるものであり、本会にとっても組織運営の在り方を改めて見つめ直す重要な契機となりました。これを踏まえ、理事会・評議員会・監査体制がそれぞれの役割と責任を明確にし、相互に連携しながら、信頼される法人運営の確立に努めています。

○理事会

理事会は、社会福祉法により業務執行に関する意思決定機関として位置付けられていることから、事業計画・予算の決定等、法人運営の基本方針を定める機関として社協の経営と運営の中核を担っています。また、会長は、法令に基づき自己の職務執行状況について、４か月を超える間隔で年２回以上理事会に報告を行っています。

理事会は原則として、年３回以上（６月、12月、３月）開催しています。

理事は、社会福祉施設代表１名、ボランティア連絡協議会代表１名、学識経験者５名、行政機関代表１名の計８名で構成され、多様な分野の視点を活かしながら法人運営にあたっています。

○評議員会

評議員会は、社会福祉法人の最高議決機関として定款の変更、理事および監事の選任・解任、事業計画・予算・決算の承認など、法人運営の根幹に関わる事項について審議・決議を行い、理事会の業務執行を監督する役割を担っています。

評議員会は原則として年３回以上（６月・12月・３月）開催しています。

評議員は、市議会議員代表、障がい者関係代表、民生委員児童委員代表、老人クラブ連合会代表、自治会連合会代表、社会福祉施設代表、ＮＰＯ法人代表、ボランティア連絡協議会代表、教育関係代表、商工会・商工会議所代表、女性団体代表、地区社協連絡協議会代表、竹田市ＰＴＡ連合会代表、保育園・幼稚園保護者会代表の計14名で構成され、地域の多様な立場を法人運営に反映しています。

○監査会

監事は、理事の職務執行が法令および定款に適合しているかを監査するとともに、会計の適正性について確認を行う役割を担っています。

本会では、毎年５月に法定監査を実施し、前年度の業務執行および会計処理の適正性について確認しています。さらに、事業規模や実施事業の多様化を踏まえ、適正かつ透明性の高い法人運営を継続するため、11月には中間監査を実施し、年度途中における執行状況の確認と改善に努めています。

○役員（理事、監事）及び評議員合同研修会

役員（理事、監事）及び評議員合同説明会や懇談会等を適宜開催し、事業内容や地域課題について説明を行い、加えて情報共有と意見交換を行うことで、ご理解をいただいています。

各団体支援

目的

竹田市社会福祉協議会では、地域福祉の推進を図るため、下記の団体の事務局として会議の運営や研修の企画、関係機関との連絡調整など、活動支援を行っています。

竹田市民生委員児童委員協議会

目的

竹田市民生委員児童委員協議会は、民生委員・児童委員相互の交流を深め、資質の向上と活動の充実を図ることを目的としています。地域住民の身近な相談役として、生活上の困りごとや福祉課題を早期に把握し、関係機関と連携しながら誰もが安心して暮らせる地域づくりに取り組んでいます。

竹田市民生委員児童委員協議会総会

民生委員児童委員街頭PR活動

竹田市地区社協連絡協議会

目的

竹田市地区社協連絡協議会は市内の各地区社会福祉協議会が連携し、地域福祉活動の充実を図ることを目的としています。各地区での取り組みや課題を共有し、情報交換や意見交換を通じて、地区社協相互のつながりを深め、地域全体で支え合う体制づくりに取り組んでいます。

竹田市地区社協連絡協議会会長・事務局長会議

竹田市ボランティア連絡協議会

目的

竹田市ボランティア連絡協議会は、市内で活動するボランティア団体や個人が連携し、情報共有や相互協力を図ることを目的に設立されました。福祉や防災、環境など多様な分野の活動を通じて人と人とのつながりを大切にし、継続的な活動へとつなげながら支え合いのある地域づくりを進めています。

竹田市ゴミフ大会

ボラ連交流会

竹田市共同募金委員会

目的

竹田市共同募金委員会は、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らすことができるよう、集められた募金を高齢者や障がいのある方、子ども、地域福祉活動などに役立て、支え合いのまちづくりを進めることを目的として活動しています。共同募金運動は、国の法律（社会福祉法）に基づき、毎年全国的に行われている募金活動で、「じぶんの町を良くするしくみ。」として取り組まれています。

内容

「赤い羽根共同募金」は、毎年10月１日から３月31日までを運動期間として、自治会長を通じて皆様にご協力いただいています戸別募金をはじめとし、自動販売機募金、街頭募金（市内店舗・竹楽）、ふるさとサポート募金等の活動を行っています。

「歳末たすけあい募金」は、毎年12月1日から12月31日までを運動期間として、毎年12月に開催する歳末助け合いチャリティーショーをはじめとし、募金箱の設置等の活動を行っています。

募金の活用例

- 高齢者を対象とする活動
- 学校を対象とする活動
- 子育てを対象とする活動
- 生活困窮者を対象とする活動
- 地域で安心して暮らすための活動
- 災害等準備金　など

募金活動の様子（左から荻げんきこども園園児・久住保育所園児・竹田高校生）

竹田市との共催事業

竹田市福祉功労者表彰式及びたけた福祉健康フェア

本会では、平成17年から「竹田市福祉大会」を開催し、表彰式を行ってきました。令和元年には、行政と社協が各々に実施してきた事業を発展させ、協働して行う地域づくりの取り組みとして「たけた福祉健康フェスタ」を開催することとなりました。本事業は住民主体の健康づくりと地域福祉の推進を目指すもので、その中で竹田市福祉功労者表彰式を実施しています。令和４年に、「たけた福祉健康フェア」と名称を変更し、現在に至っています。

●竹田市福祉功労者表彰式

社会福祉事業に功労のあった方々に対して、功績を称える表彰式を行っています。令和７年度からは、共同募金活動に功績のあった方々も表彰対象としています。

（※竹田市福祉功労者歴代受賞者一覧Ｐ89掲載）

●たけた福祉健康フェア

市民が生涯を通じて健康で活力あふれる人生を送ることができる「やすらぎと安心に満ちた支え合う暮らし」の実現を目指し、講演会の開催や展示・体感ブースを設置しています。

竹田市福祉功労者表彰式

たけたん食育コーナー

歳末助け合いチャリティーショー

市民の皆さんの善意による演芸等を上演し、その益金を竹田市共同募金委員会に寄付することで地域福祉活動を行う団体等に活動資金を助成し、地域福祉の促進と市民の生活安定を図ることを目的として毎年開催しています。令和２年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、やむを得ず開催を見送りましたが、募金活動は継続して行いました。令和６年度に節目となる20年を迎え、記念回企画として抽選会等を実施しました。自治会を始め、各種団体の皆様の温かいご支援に支えられ、継続して開催することができています。

令和6年度歳末助け合いチャリティーショーの様子

合併後20年間で休止・廃止した事業

●在宅介護支援センター

（受託終了日）平成18年３月31日

（受託終了した理由）

平成12年に在宅介護支援センター受託しました。

基幹型の在宅介護支援センターを地域包括支援センターに移管することとなり受託終了しました。

●荻町介護保険サービスセンター福祉用具貸与事業

（廃止年月日）平成22年３月31日

（廃止した理由）

当初市内に事業所が少ないこともあり荻町にて当該事業に取り組んできましたが、他の民間事業所のサービスが充実してきたことから事業を廃止しました。

●介護保険事業

・ヘルパーステーション竹田（訪問入浴介護事業）

・竹田市介護保険サービスセンター（通所介護事業）

・直入町デイサービスセンター（通所介護事業）

（廃止年月日）平成28年３月31日

（廃止した理由）

介護保険事業の財源を地域福祉に活かす観点から他に先駆けて通所介護事業や訪問入浴介護事業に取り組んできましたが、他の民間事業所のサービスが充実してきたことから廃止しました。

●総合事業通所型サービス「しゃんとこクラブ」

（廃止年月日）平成31年３月31日

（廃止した理由）

３年間の事業実施を通じて、高齢者の身体機能の維持向上に一定の成果を確認することができましたが、事業を安定的かつ継続的に運営していくために必要な利用者の確保が難しい状況となり事業を廃止しました。

●直入生活支援ハウス

（受託終了日）令和２年12月31日

（受託終了した理由）

平成28年３月31日に直入デイサービスセンターが廃止となり制度としてデイサービスセンターと生活支援ハウスは一体的に運営する方針のため市からの委託を修了しました。

休止・廃止した事業

●竹田市児童館

（受託終了年月日）令和２年３月31日

（受託終了した理由）

地域子育て支援拠点事業への移行に伴い事業受託を終了しました。

●高齢者の生きがいづくりと健康づくり推進事業（生きがいサロン事業）

（受託終了年月日）令和３年３月31日

（受託終了した理由）

住民主体型のサロン運営を推進する方針への転換に伴い事業を修了しました。

●菅生放課後児童クラブ

（受託終了年月日）令和７年３月31日

（受託終了した理由）

菅生小学校の統合により事業受託を終了しました。

●病児保育事業

（受託終了年月日）令和７年３月31日

（受託終了した理由）

専門職の確保が難しく、市との協議のうえ受託を終了しました。なお、あさひケ丘保育園が事業を実施するようになりました。

これからの社協のあるべき姿

The Future Vision for the Social Welfare Council

中期的な取り組み内容

Medium-Term Initiatives

本市の福祉の現状は、少子高齢化や核家族化などが進み、一人暮らしや高齢者のみ世帯が増加していく中で、地域や家族などにおける、人とひととのつながりが弱まっています。さらに、コロナ禍が長期化したことで、より一層つながりを保つことが難しくなり、生活上の課題は複雑化・深刻化しています。

また、社会環境では、働き手の不足、物価高騰、最低賃金の引き上げなど、非常に難しい経営判断を求められる時代となっています。

全国社会福祉協議会は、平成４年に策定しました「新・社協基本要項」を昨年度、発展的に見直し、「社会福祉協議会基本要項2025」を策定しました。また、「５年後、10年後の社協の姿」をＡＩ（人口知能）で調べたところ、「社協は単なる福祉サービス提供団体から「地域の共生社会を推進するエンジン」へと進化していくでしょう。その中核にあるのは、地域住民との協働、制度との接続、民間との共創です。

一方、悲観シナリオでは、このまま抜本的な変革・若返り・民間との連携強化などがなされなければ、社協は「名ばかりの地域福祉組織」に陥り、徐々に住民からも行政からも信頼されない存在となるリスクがある。」という結果が報告されました。

こうした状況を踏まえ、本会は、持続可能な組織運営の確立と地域福祉の推進を積極的に展開していく必要があります。今後の取り組みは、次のとおりです。

１．新たな事業着手

①ヘルパー不足に伴う「生活支援」の新たなサービス体系の創設
②竹田市版フードバンク・フードドライブの仕組みづくり
③国が検討している「身寄りのない高齢者等」への対応
④働き方改革やワークライフバランス等を踏まえ、年功序列から成果主義への人事制度の移行

２．重点的な取組み

①地域住民が抱える複雑化・複合化した課題に対し、年齢や障がいの有無に関わらず包括的な支援を行う「重層的支援体制整備事業の充実」
②認知症や障がい等により判断能力が不十分な方に支援を行う「法人後見事業の充実」
③市内の事業所が縮小・廃止する中で、介護保険事業所及び障がい福祉事業所の持続的・安定的な経営
④少子化の中で、荻げんきこども園及び久住保育所の持続的・安定的な経営

今後、本市におきましても人口減少は続いていきますが、様々な生活課題・福祉課題にしっかりと向き合い、行政・市民の方々とともに「安心・安全に暮らせる地域づくり」を目指し、邁進していく所存でありますので、引き続きのご支援・ご協力をお願い申し上げます。

合併20周年記念職員研修会

令和８年２月３日㈫に、20年をひとつの節目として、「これからの社協のあるべき姿」と題し、大分県社会福祉協議会　総務・企画情報部　主幹　衛藤真紀子様に講演をいただきました。この研修会で次世代へ繋ぐ持続可能な社協運営への転換を考える機会となりました。

また、AIによる５年後、10年後の社会福祉協議会の姿（P74 ～ 75）を基に「社協職員として何をすべきか」をテーマにグループワークを行いました。（P73）

講演の最後にあった「頑張らなくていい　結果を出すこと」の言葉が印象に残りました。今後も結果を出せるよう取り組んでまいります。

「これからの社協のあるべき姿」職員から出た意見

【研修後の感想】　※アンケート結果より抜粋

- 今あるべき社協の姿、さらに将来的な在り方について、改めて自問自答させられる研修だった。
- 地域住民との関係性がないと、地域と共同できないと感じた。
- 目の前の事業の解決にとらわれるばかりでなく、社協という組織の地域における役割の理解や、10年後の社協の姿を考えるという視点も必要だと感じた。
- 社協のするべきこと、求められていることが自分の中で少し明確化できた気がしました。竹田市社協の目指す姿が職員の中で共通認識できると、自分の今の仕事の向かう先がしっかりとらえられ、やりがいや成果につながるように感じました。
- 人とのつながりは何年先も同じと思います。コミュニケーションをもっともっと増やしていくことが大切だと思います。
- 民間性と公共性のバランス感覚を養うのが難しいと感じた。社協の基本的な役割や位置付けを改めて知る機会となりました。自分の課の目的や課題を考える時、社協としての従来の役割を常に頭に置いて考えることも大切なのかもしれないと思いました。

【自分がどうしたらよいか】

- 住民に使われる専門職。積極的にこれまで以上に地域との関係性を構築していく（地域資源を活用できる職員となりたい）
- 地域に出向き、地域の人との関係を深め、信頼される存在になり、少しでも住みやすい地域にするために行政につなぐことに頑張りたいと思いました。
- 自分の仕事内容だけではなく、視野を広く持って他の事業にも関心を持っていきたい。
- 他部署と連携し、チームでその方（家族）を支えるような人間になりたいと思う。
- 社協の役割、位置づけを念頭にしっかりと意識しながら毎日の仕事をやっていきたい。

グループワーク抜粋

つながる

- 地域とつながる
- 居宅ケアマネとの連携
- 他部署へのリスペクトを忘れない
- 支援に必要と考える関係者とつながる
- 地域企業でのボランティア活動
- 一般企業とのつながり
- 社協の環境を良くする
- 地域の行事に参加する
- 外国人移住者のフォロー
- 児童・民生委員との連携
- 他部署との連携（社協内、外）

結果を出す

- 期限を守る
- 結果を出す方法を考える（頑張りすぎず効果を出す）

伝える

- 情報発信する（SNS）
- 地域住民へ必要性を伝える。（協力依頼）

聴く

- 課題、困っていることを伝えていく
- 個別の緊急時の対応
- 住民の困りごとを聴く（ニーズの把握）

視る

- 世帯全体をみる
- 地域の人が竹田で暮らし続けることを考える
- 複数の課題を抱えている方の対応
- 社協組織や支援者など全体を見る意識を持つ

5年後、10年後の社協の姿

5年後（2030年頃）の社協の姿

①地域共生社会の「中核支援組織」としての確立

●「断らない相談支援」や「参加支援」、「地域づくり支援」など、包括的な支援を展開。
●地域包括支援センターや地域福祉推進計画と連携しながら、課題を抱える住民の“最後の砦”として機能。

②多機関連携の要としての進化

●医療、教育、行政、NPO、企業などとの実質的な連携体制が構築され、「地域福祉のハブ」としての役割が強化。
●ICTを活用した情報共有・マッチング・ケース管理が高度化。

③人材の多様化と専門性の向上

●ソーシャルワーカーだけでなく、ICT人材、地域づくりファシリテーター、外国人支援者など多様な職種が参画。
●若年層の関心を引く新たな採用・育成モデルも導入され、世代交代が徐々に進行。

10年後（2035年頃）の社協の姿

①「共助インフラ」としての定着

●行政による「公助」だけでなく、地域住民・企業・団体による「共助」を支える基盤組織としての立ち位置が明確化。
●災害時の地域レジリエンス向上にも不可欠な存在に。

②財源構造の多元化

●自主財源（寄付・協賛・受託事業・クラウドファンディングなど）の拡大により、持続可能性を確保。
●民間セクターとの連携による新たな収益モデル（例：社会的投資や成果連動型支援など）も実現。

③「地域福祉テクノロジー」の導入と定着

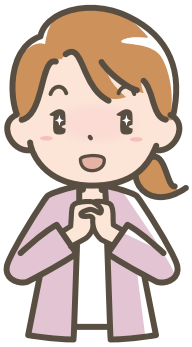
●AIやビッグデータによる困窮リスクの早期把握、個別支援の最適化が可能に。
●デジタルデバイドへの配慮を含めた「包摂的DX（デジタル・トランスフォーメーション）」を推進。

社会的背景・トレンドを踏まえた課題と展望

背景・課題	社協の対応／展望
少子高齢化・単身世帯の増加	生活支援体制整備事業の深化、支え合いの仕組みの多様化
孤立・8050問題・ヤングケアラー等の顕在化	重層的支援体制整備事業を軸に、断らない相談体制の充実
行政・制度の縦割りの限界	地域丸ごとの支援体制の再構築、地域共生社会の推進役
デジタル社会の進展	ICT・AIを活用した支援モデルの構築、デジタル包摂の担い手

結論：未来の社協は「地域をつなぎ、変化を生み出すエンジン」

社協は単なる福祉サービス提供団体から、「地域の共生社会を推進するエンジン」へと進化していくでしょう。その中核にあるのは、地域住民との協働、制度との接続、民間との共創です。
つまり、10年後の社協は“何かを提供する組織”ではなく、“ともに地域を変える組織”になっていると予想されます。



5年後、10年後の社協の姿 悲観シナリオ

5年後（2030年頃）
ゆるやかな衰退期の始まり

①人材難・高齢化による機能不全

●若手職員の採用が困難となり、既存職員の高齢化が進行。
●高齢の地域住民ボランティアに依存していた活動が縮小・停止。

②「共生社会」政策の形骸化

●国の推進する「重層的支援体制整備事業」等が十分に浸透せず、現場では従来の個別支援にとどまる。
●「包括的支援」と言いながら、実際は“相談を受けるだけ”の受動的な対応に終始。

③行政との関係が形式的になり、実効性を欠く

●補助金や委託事業に依存する形が強まり、行政の下請化が加速。
●独自のビジョンや企画力を持たない組織になり、「やらされ感」が蔓延。

10年後（2035年頃）
制度疲労と社会的影響の顕在化

①“存在意義”への根本的な問い直しに直面

●地域住民からの信頼が希薄に。「社協って何してるの？」という声が頻出。
●若者や新住民に認知されず、地域から孤立する組織に。

②“つながりのインフラ”としての地位を失う

●地域の支援ニーズに応えられず、空洞化したネットワークだけが残る。
●コミュニティ崩壊の中で、孤独・孤立・虐待・8050問題が深刻化しても、機動的に対応できない。

③財源危機・持続不能な組織へ

●寄付・会費が減少、委託費も減額され、財源の複線化に失敗。

社会的背景・トレンドを踏まえた課題と展望

社会背景	社協に与える悪影響
超高齢社会の加速	地域包括ケアが成り立たず、福祉ニーズの空白が拡大
孤立と貧困の連鎖	介入できず、地域崩壊の要因に
デジタル化と格差の進行	ICT対応できず、情報発信・連携ができない組織に
行政の縮小・効率化	「地域に投げられる課題」が増えるが、社協は受け止めきれない

悲観シナリオの結論

このまま抜本的な変革・若返り・民間との連携強化などがなされなければ、社協は「名ばかりの地域福祉組織」に陥り、徐々に住民からも行政からも信頼されない存在となるリスクがある。

つまり、「地域福祉の中核」から「地域福祉の空洞」へ転落しかねないのです。

国指定史跡「岡城跡」（竹田市）

おづる湧水（竹田市直入町）

くじゅう花公園（竹田市久住町）

白水の滝（竹田市荻町）

先輩職員の方々からのメッセージ

MESSAGE

後　藤　隆　裕　　様

児　玉　誠　三　　様

渡　部　哲　哉　　様

吉　岡　庸　博　　様

神　品　實　子　　様

佐　藤　絹　江　　様

吉　竹　妙　子　　様

倉　原　準　一　　様

小　出　久美夫　　様

福　地　郁　恵　　様

佐　藤　尚　芳　　様

【順不同です】

合併20年もう20年月日の経つのを早く感じています。

私が社協にお世話になったのが、平成20年４月から３年間でした。

17、８年前のことですから記憶もだいぶ薄れていますが、一番戸惑ったのは、市役所時代経験のない理事会や評議員会の対応、また予算収支が単式でなく複式簿記で、全く理解できませんでしたが、職員の皆さんに支えていただきながら何とか務められたと思います。記憶に残っているのは、地域包括が現在の木部会長が責任者で、体を壊さないか心配するくらい、事業を軌道に乗せるため、皆さん本当に昼夜をたがわず頑張っておられたことです。

また、当時の髙橋会長と毎月、各支所や事業所の訪問で、意見交換やいろんな勉強をさせていただきました。仕事以外で記憶に残っていることは、平成23年３月に発生した東日本大震災です。仕事に出ていた職員が帰庁して、ラジオで東北地方で大きな地震があったと話があり、すぐにテレビを入れたら大津波が押し寄せ、船や家を押し流したり、仙台空港の滑走路を海水が流れたり、悲惨な光景が映し出されたのが強烈な印象で残っています。益々進む少子高齢化の時代、福祉に携わる人員の不足もあり、社協の任務はますます重要な時代となっています。

いずれ私どもが皆さんにお世話になる時代もすぐそこまで来ていますが、皆さん方のますますのご活躍を期待しています。

後藤　隆裕

平成28年４月、事務局長に就任し、同30年６月迄の短い期間でしたが職員や役員の皆様に支えられ極めて濃い時間を過させて頂きました。

就任直後の４月16日熊本地震の本震に見舞われましたが、当時地域の支え合い活動の推進に関わって頂きました「さわやか福祉財団」さんの強い後押しもあり全国で始めてとなる県境を越えた「南阿蘇支援ボランティアベースキャンプ」を設置することになり、旧荻町役場跡の施設を拠点とし、ボランティアの受入れ、宿泊場所の確保、送り出し及び情報の発信、支援物資の受入れなど短期間の準備と実践でしたが、平成24年の竹田水害での竹田市社協の災害ボランティアセンターの運営を経験した職員の活動により、５月～７月迄の間２千数百名のボランティアを送り出し、その活動は連日マスコミに取り上げられ話題となりました。この活動を通じて社会福祉協議会の使命や役割を再認識する事ができ貴重な経験となりました。又、平成28年に改正された社会福祉法により、日常生活又は社会生活上支援を要する者に対する無料又は定額の料金で福祉サービスを提供する事を責務として規定された事もあり、既に活動中の「暮らしのサポートセンター」の明確な位置づけや継続的運営支援の検討の他、荻町認定こども園の建設検討委員会の開催など、市民との対話に多くの時間を費やした事が思い出されます。

地域包括ケアシステムの理念である「住みなれた地域で自分らしく」生活を続けられる為にも竹田市社会福祉協議会の益々のご活躍とご発展を期待しています。

児玉　誠三

竹田市社会福祉協議会が、合併20周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

竹田市社会福祉協議会が多くの市民の皆様や関係諸団体の支援を得て今日を迎えられたことは、会員並びに職員各位の並々ならぬご尽力の賜物と心より敬意を表します。

竹田市は超高齢社会が進行し65歳以上の高齢化率は49.6％となり、地域によっては50％を大きく超える地域もあります。高齢者や未来を担う子ども達が安全・安心に毎日を過ごせる竹田市にするために、竹田市と社会福祉協議会は車の両輪として、今後とも連携を深めていく必要があります。

平成23年から取り組んだ雇用対策事業の中で、当時は馴染みのなかった有償ボランティアの仕組みを用いて「暮らしのサポートセンター」を立ち上げ、また、市民主体の健康インストラクターの組織「竹田ヘルスフィットネス」とともに地域での活動を広げ、竹田市社会福祉協議会はそうした活動を全面的に支援しました。また、市と連携をしながら地域での助け合いなど地域福祉活動についてワークショップ手法を用い、話し合いの場「よっちはなそうかい」を17圏域（概ね小学校区）で展開して助け合い活動を深めていきました。こうした取り組みはのちに地域コミュニティの組織化にも活かされています。

全国でも最先端を走る超高齢社会の竹田市ではありますが、だからこそ、国も想定していない環境下での福祉政策に対して、今後も様々なチャレンジを続けていただきたいと願っています。

社会福祉協議会では、様々な活動や支援を通じてその実現に取り組まれています。今後も、「住みたいまち竹田市」を目指し、竹田市社会福祉協議会と共に進んでいきたいと思います。

終わりに、竹田市社会福祉協議会の一層のご発展と職員各位のご健勝・ご活躍をご祈念申し上げます。

渡部　哲哉

社会福祉法人竹田市社会福祉協議会が合併20周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。これまで地域の皆様に寄り添いながら歩んでこられた歴史は多くの人々の支えと地域への思いによって築かれたものだと思います。

日々の活動を通して、助け合いの心をつなぎ、誰もが安心して暮らせる地域づくりに力を注いでこられたことに深く敬意を表します。

高齢化や人口減少、暮らし方の多様化など、地域社会を取り巻く状況は年々変化しています。その中で住民同士のつながり、支えあいを大切にし、福祉・介護サービスの提供やボランティア活動の推進、見守り・支えあいの仕組みづくりなどを積極的に進めてこられたことは、竹田市民の大きな支えとなったと思われます。

特に平成24年の北部九州豪雨災害での災害ボランティアセンターの運営や平成28年の熊本地震の南阿蘇復興支援の竹田ベースキャンプの運営等、通常業務外の様々な活動も積極的に行ってきました。そのような中、住民の小さな声に耳を傾け、一人ひとりの生活に寄り添う姿勢はこの20年間で確かな信頼を育んできたのではないでしょうか。

この節目を新たな出発点として、さらに多くの人々が「ここで暮らしてよかった」と思える竹田市になるよう、これからも力を発揮されることを願ってやみません。合併20周年、本当におめでとうございます。

吉岡　庸博

地域包括支援センターの幕開け

合併社会福祉協議会の20周年誠におめでとうございます。

私が貴社会福祉協議会（以下社協と略）に奉職したのは平成28年の４月で、37年間勤めた大分県からそのままの異動でした。県の最後の年に、「来年から市町村に地域包括支援センター（以下地域包括と略）ができる、保健師は必置の職業である」と決められ、私は研修会等で、地域包括に保健師の行手が無くて困るような事の無いよう進んで志願し、結果を出すよう話していました。そのような時に、出身地の竹田市社協からのお話で、喜んで即答させて頂きました。

さて、入職してみると、そう簡単ではありませんでした。確かに職種は揃っているものの人数が足りません。ついに鬱で休む職員が出てしまいました。私は、当時の社協会長の顔を見る度に「このままではまた鬱が出ます」と半ば脅迫めいたお願いをし続けました。

しかし、会長は嫌な顔もせず真剣に考えて下さり随分数も増えました。苦しいけれど楽しい立ち上げでした。ところで、竹田市の素晴らしいところは、行政と社協、その他色々な機関との連携の良さにあります。

先日、竹田市のケーブルテレビを見た時、「しゃんしゃん体操」をしていました。私は当時を懐かしく思い出しました。この体操は管内の保健師仲間等で楽しく創り上げたものです。

これからも、行政と社協が一体となって仲良く取り組んで下さることを切に希望しています。

神品　實子

ホームヘルパーとして

社会福祉法人竹田市社会福祉協議会20周年記念誌発行お慶び申し上げます。

家庭奉仕員として入社したのが昭和61年４月でした。事務所は竹田市下町の憩の家にあり、ヘルパー７名のスタッフで始まりました。何も分からず何度も研修や実習時にヘルパー１級研修は、日赤の橋田先生に教わった事今も心に残っています。チャリティーバザー、社会福祉大会、年末のチャリティーショーと１年間の行事がありました。ヘルパー全員でチャリティーショーへ参加し楽しかったです。

昭和61年の年末、24時間テレビ「愛は地球を救う」入浴車の寄贈ありオペレーター１名、看護師１名、ヘルパー５名入りました。

平成６年登録ヘルパー養成が始まり５名入社、平成８年度市役所横に新しく竹田市総合福祉センターが落成、社協移転、気持ちも新たに家庭奉仕員から名称が「訪問介護ヘルパーステーション」ホームヘルパーと呼ぶようになりました。常勤10名、登録ヘルパー31名、利用者160人は居たと思います。デイサービスも始まり、利用者さん月～土曜日まで１日の利用者数40人前後の参加がありました。

平成12年介護保険の施行、平成13年竹田生きがいサロン施行、平成17年４月、１市３町が合併し大きな社協になり訪問介護ヘルパーは、玉来の事務所へ移転となり活動してまいりました。たくさんの人との出会いがあり別れがあり頭の中では走馬灯のよう、あれこれ思うと39年間無事に勤務で来た事感謝いたします。ありがとうございました。

佐藤　絹江

竹田市社会福祉協議会合併20周年を迎えるにあたり心よりお祝い申し上げます。

私は、民営化移行より「社会福祉協議会久住保育所」に勤務し定年を迎えました。子どもの行動や考えには理由があり、子どもの問いかけを受け止め、きちんと応えることが大人の役目と感じる日々でした。

講話で「どうしてお母さん（父）の気持ちがわからないの？と言っていませんか？わからないのは当然です。子どもは大人の経験がありません。でも、大人は子ども時代を過ごしています。だから子どもの気持ちがわかるはずです」と。全ての場面に置き換えられる言葉だと現在も心に残っています。

児童福祉と社会福祉はそれぞれ異なる目的を持ちますが、「全ての人が対象となる社会福祉事業」を展開する皆様の努力に触れ、保育所も社協職員として動こうと、社会福祉センターに避難された方々にささやかですが、かき氷やヨーヨー釣りを楽しんでいただいた事もありました。

「福祉のまちづくり」を目指し、厳しい社会状況の中でも多くの方々の熱意と努力によって、地域住民のニーズに応じた支援を行い、市民の身近な存在として活動されています。

大人も児童も互いに寄り添える社会、安心して暮らせる竹田市であることを願い、末筆ながら竹田市社会福祉協議会の益々のご発展を心より祈念申し上げます。

吉竹　妙子

竹田市社会福祉協議会合併20周年に寄せて

合併20周年を迎えられおめでとうございます。今日まで礎を築き発展されてこられた役職員の皆様に敬意を表します。

私は、荻保育園の運営主体が竹田市から竹田市社会福祉協議会に移管されることに伴い、平成28年、29年度の２年間、荻保育園に勤務しました。２月から想定される準備を始め、３月31日まで竹田市立、翌４月１日は竹田市社会福祉協議会と、殆どの職員が入れ替わる中で、保育園業務の性質上、１日の猶予期間もない舞台転換でしたが、全職員が目的意識を共有して無難にスタートすることができました。ところが、４月14日、15日、16日と熊本地震が発生、収まらない余震で園児、保護者、職員の中には恐怖・疲労で変調を訴える人が出てきました。

一瞬の出来事で、目の事象が脆くも崩壊してしまう災害の脅威を痛感しました。

その後徐々に日常を取り戻しましたものの、今まで経験したことのない災害でした。

2016年５月から災害ボランティアセンターを荻町役場旧庁舎に開設、南阿蘇村の災害復旧支援基地となりました。この時の職員の皆さんが役割分担の中で、使命感をもって機敏に行動されていた姿を、旧庁舎の前を通る際に今でも鮮明に思い出します。

今後も、職員皆様の無限大の能力を、役員・幹部職員のもとに結集し、30周年に向けて邁進されることをご期待申し上げます。

末筆ながら、竹田市社会福祉協議会の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致します。

倉原　準一

「荻げんきこども園のスタート」

竹田市社会福祉協議会の合併20周年おめでとうございます。

私は、2018年より３年間、地域初の「幼保連携型認定子ども園」の立ち上げの任を受け、竹田市社会福祉協議会にお世話になりました。

「学校」かつ「児童福祉施設」として、時代の要請や地域の願いに応えるため、どのような特色ある子ども園にしていくか、職員とともに奔走した３年間でした。「やさしくかしこくたくましく」という園目標を掲げ、新しい時代に向けた幼児教育・保育はいかにあるべきか。職員と勤務終了後何度も研修や会議を重ね、教育保育課程の編成をゼロから積み上げていきました。認可に向けた資料づくりも膨大なもので相当なエネルギーを費やしました。スタートこそ大変でしたが、職員一丸となって新しいことに挑戦していったことは貴重な経験でした。

新しい教育課程に組み込んだ、幼児体育や英語教育、音楽教育、情操教育、食農教育等は、先生方の意欲的な取り組みにより、荻げんきこども園の特色として大切にされ、根付いているようです。うれしい限りです。

フェイスブックで発信した園の活動の様子は今でも閲覧数が増えています。私も時々閲覧しますが、当時のことが懐かしく思い出されます。どんな大変なときもで、「えんちょうせんせーい、なにしよんの？」となついてくる子どもや活動を盛り上げてくれる「役者」揃いの先生方には何度も救われた３年間だったと思います。荻げんきこども園での経験は私にとってかけがえのない人生の宝物となっております。

小出　久美夫

竹田市社会福祉協議会の合併20周年を心よりお祝い申し上げます。

あれからもう20年も経ったんだなあと当時のことを思い出します。

私は旧久住町社会福祉協議会で採用され、久住保育所の事務を担当し、合併した２年後、本所総務福祉課財政班へと異動しました。合併したその年の中間決算において、なかなか数字が合わず福祉センターで朝まで徹夜したことを今でもハッキリ覚えています。合併した１市３町それぞれのやり方があり、うまくまとまらず、またお互いの意思疎通がきちんと出来ておらず、組織としてうまく機能していなかったように思います。

その後、何度も話し合い、時にぶつかり合いながら、少しずつ改善していったことは今となってはいい思い出です。

合併して20周年を迎えた現在、地域における問題、課題も少しずつ変化しているように思います。

これからも竹田市社会福祉協議会が地域福祉の向上に寄与し、住民が安心して暮らせる社会の実現に向けて努力されることを期待しています。

竹田市社会福祉協議会のますますのご発展と、職員、関係者の皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

福地　郁恵

社会福祉法人竹田市社会福祉協議会合併20周年おめでとうございます。

私が社協に入った時は、まだ法人化されていなくて、周りの方々は、社会福祉協議会は役場の職員であると思われていた時代でありましたので、説明するには大変でありました。その後、行政と一緒に荻町ボランティアの会の発足準備に追われ当時の住民課長や保健師と共に頑張って結成に至り、大山町のキャッチフレーズで「梅栗植えてハワイに行こう」に負けないように荻町独自でボランティア手帳を作ってポイント制を始めて貯まったら何処かに行けるといいなあと大きな夢と目標があったのを思い出します。

愛のトマト定期便が長く継続されていますが、当時は職員が少ない中、トマトを大分市内の施設まで配った事も思い出されます。

また、平成の大合併に伴い社協も合併へと平成17年４月に設立され、その間、日夜を問わず準備などの資料作成に頭を痛めたことが思い出として、いい経験をさせて頂きました。

簡単ではありますが、私の思い出として述べさせてもらいました。

末筆ながら社会福祉法人竹田市社会福祉協議会の一層のご発展とご活躍を祈念致します。

佐藤　尚芳

南阿蘇ベースキャンプの様子

荻保育所旧園舎

南阿蘇ベースキャンプの様子

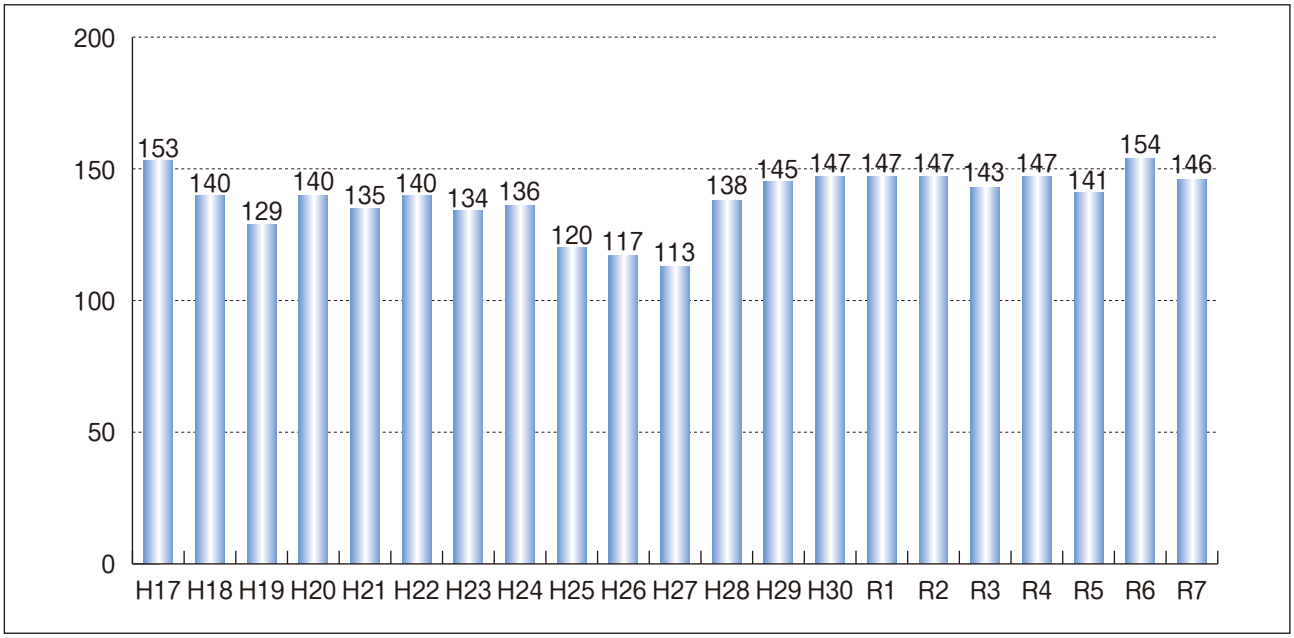
資　料　編

DATA

社会福祉法人竹田市社会福祉協議会職員推移

	正規職員	再雇用職員	専門職員	嘱託職員	臨時職員	短時間職員	合　計
平成17年4月1日	62	0	0	13	29	49	153
平成18年4月1日	58	2	0	11	33	36	140
平成19年4月1日	52	0	7	7	26	37	129
平成20年4月1日	49	4	4	10	28	45	140
平成21年4月1日	47	5	3	5	29	46	135
平成22年4月1日	46	5	4	9	26	50	140
平成23年4月1日	41	5	3	8	28	49	134
平成24年4月1日	44	2	3	10	31	46	136
平成25年4月1日	44	1	3	9	27	36	120
平成26年4月1日	39	2	2	12	22	40	117
平成27年4月1日	39	1	3	13	23	34	113
平成28年4月1日	49	1	4	24	23	37	138
平成29年4月1日	47	2	5	45	0	46	145
平成30年4月1日	41	1		63	1	41	147
平成31年4月1日	44	1		55	0	47	147
令和2年4月1日	46	1		50	0	50	147
令和3年4月1日	46	1		48	0	48	143
令和4年4月1日	46	1		46	0	54	147
令和5年4月1日	44	0		41	0	56	141
令和6年4月1日	46	0		42	0	66	154
令和7年4月1日	45	0		36	0	65	146

（平成30年度より専門職員を嘱託職員へ変更）

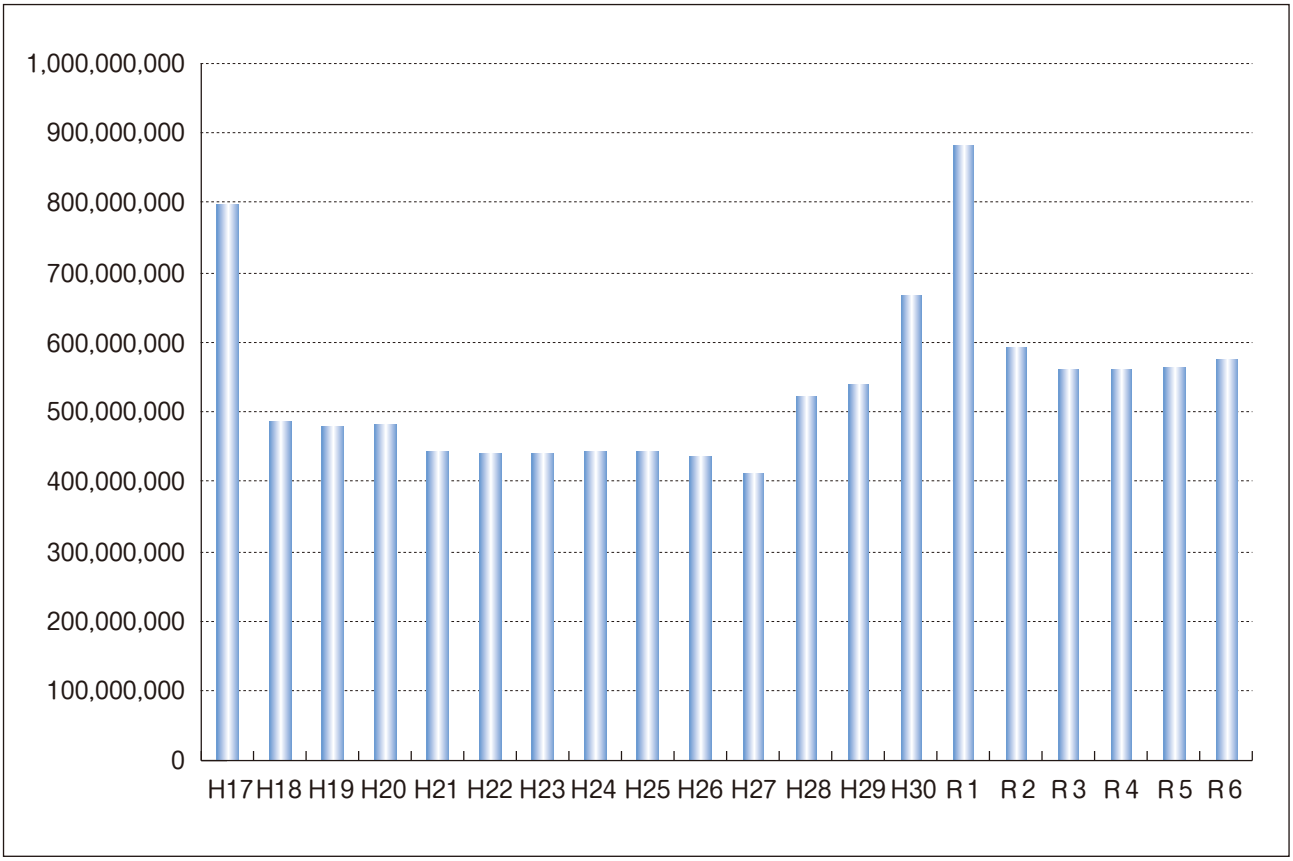


竹田市社会福祉協議会事業費総額推移

年度	決算額(円)	年度	決算額(円)	年度	決算額(円)	年度	決算額(円)
平成17	796,209,204	平成22	440,995,426	平成27	410,946,767	令和2	591,185,006
平成18	486,825,516	平成23	440,973,176	平成28	519,773,650	令和3	559,362,334
平成19	477,713,601	平成24	443,325,692	平成29	539,624,043	令和4	560,362,133
平成20	481,284,856	平成25	443,605,864	平成30	666,637,942	令和5	562,579,165
平成21	441,992,440	平成26	435,447,661	令和元	882,975,137	令和6	573,032,021

竹田市社会福祉協議会事業費総額

(単位：円)



※ 平成30年度および令和元年度につきましては、荻げんきこども園、園舎建設を行いました。

竹田市福祉功労者歴代受賞者一覧

竹田市内において社会福祉事業に功労のあった方々を表彰して、その功績をたたえることを目的とし、竹田市と共催で開催する竹田市福祉功労者表彰式にて受賞した方々です。

（数字は人数を表す）

開催	年度	表彰							感謝状			
		模範自力更生者	明るい高年者	老人介護・重度障がい者介護者	社会福祉事業関係協力者	社会福祉事業永年勤続者	優良社会福祉施設・団体	社会福祉協議会功労者	社会福祉事業関係協力者	社会福祉事業永年勤続者関係協力者	社会福祉協議会功労者	社会福祉事業関係協力団体
福祉大会	平成17	2	35	24	4	16			20	34		4団体
	平成18	2	37	14	3			2	17	3	9	
	平成19	8	37	18	16	6		5	4	15	8	
	平成20	1	53	13	24			2	41		1	
	平成21	2	38	7	2				2	1	5	
	平成22	1	47	6	15・1団体			1	30・2団体	1	5	
	平成23	3	38	3	2	3			13		8	
	平成24		39	4	10	1		1	38	6	2	
	平成25	2	37	6	8・1団体	3			52	3	6	
	平成26		33	3	5	1		4	12	3	13	
	平成27	1	30	2	4				6	6	14	
	平成28		30	4	16	7		1	37	9	15	
	平成29		36	4	1	3	2団体		8	8	11	
	平成30		32	1	2			3	4		6	
福祉功労者表彰式	令和元	1	35	1	11	1		5	34	9	5	
	令和2	1	24	2	3			4	7	7	8	
	令和3	1	17		4	1		5	13	12	9	
	令和4		23	1	7・1団体	1	1団体		42	5	9	
	令和5		11	2	3				49	1	2	
	令和6		10		3・1団体	2		2	25	4	4	
	令和7		11	1	6	8		1	45	6	11	

合併20周年記念誌作成プロジェクトチーム

会長	木　部　眞里子
事務局長	小　林　　慶
総務課長兼久住支所長	坂　本　直　樹
地域福祉課長	本　田　直　美
生活相談課長兼荻支所長	後　藤　元　成
地域包括支援センター長	赤　木　美　穂
総務課参事兼在宅福祉課長	赤　嶺　明　子
荻げんきこども園長	阿　南　哲　也
久住保育所長	白　石　由　子
地域福祉課課長補佐兼直入支所長	大久保　孝　博

平成17年から令和６年までの主な事業を記載させていただいています。
ただし、令和７年の最新状況も記載している事業等がございます。

社会福祉法人 竹田市社会福祉協議会
法人設立20周年記念
竹田市社会福祉協議会20年のあゆみ

令和８年５月発行

【企画・発行】
社会福祉法人 竹田市社会福祉協議会
〒878-0011
大分県竹田市大字会々1650番地
電話0974-63-1544　FAX0974-63-1050

【制作】
合併20周年記念誌作成プロジェクトチーム

【印刷・製本】
㈲岡鶴堂